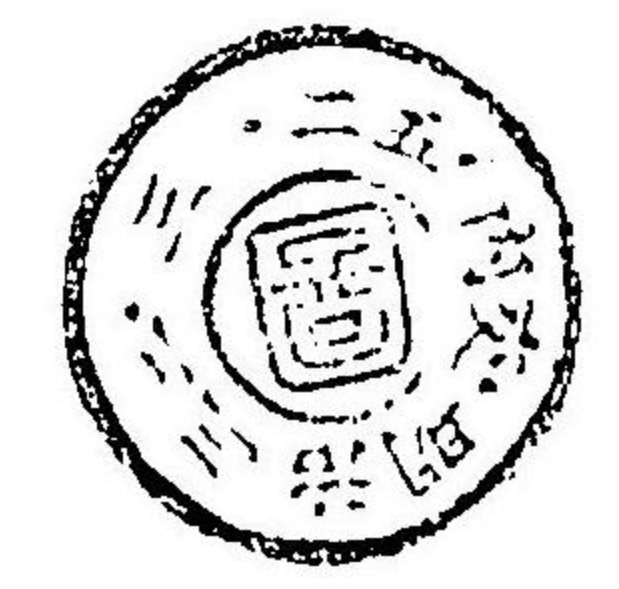


山

集

水
明

不
細
久
宜
書



(一) 鹿 兒 島 土 産

鹿兒島土産序
 薩隅の地山嶽高く峙ち海洋深く漲り崗陵河川亦其間を點綴す此の山光水色の中果して何ものをか包容するぞ山に燦爛目を眩せしむる黄金あり水に潑刺口を喜はしむる魚族あり濟々たる國士古今輩出し累々たる國産東西簇生す天與の樂土とは其之を謂ふか然れども地域偏し境界極まり交通未た便ならずして往來尙ほ疎なり是を以て江湖の人薩隅を詳にせず薩隅の人亦江湖に其國情を明にせざるもの多きか如し斯の多數なる國士は如何にして養成せられしか斯の豊富なる國産は如何にして造出せらるゝか一事一物皆多少の歴史を有し又風土に關するものありとせば之を研窮する者自ら興味津々の感を生じ自己に領得する所ろ鮮少なからざるべし彼の海門岳無心に聳へ薩摩灣無意に濛ふと雖も其樹木の鬱蒼たる處其波濤の茫漠たる邊乃ち薩隅の薩隅たる所以のものあつて存す陸の凹凸するもの水の縈廻するもの世人空しく觀又徒らに察すべから

ず況んや事物の複雑人事の紛糾するものあるに於てをや
錦江漁長頃ろ覽島土産を編し以て國情研窮の資に供せん
とす思ふに君か警拔の見簡明の筆能く薩隅を世人に紹介
するものあらん君の嘱あり乃ち記して其卷首に序す

己亥二月

西肥日報記者

荷香

鹿兒島土產序

九州の地は阿蘇霧島の連山に縦斷せられて方域自から二
つに分る東は豊前豊後日向にして西は即ち筑前筑後肥前
肥後なり大隅薩摩の二州は別に一乾坤を作りて自餘の諸
州と相隔つ
島津氏茲に居りて國を立つるを六百余年嚴に四境の險隘
を扼して猥りに他の足跡を國內に印さしめず故を以て鹿
兒島の地は獨り地理的に他と相隔絶したるのみならず更
に政治的に一般社會との交通を截斷し以て世人をして容
易に其の内部の事情に通ずるを能はざらしたり
明治の維新行はるに際し政治的排外主義は素より全く
類れたりと雖も地理的鎖國の事實は猶ほ未だ除くに至ら
ざるを以て世人の鹿兒島を知るもの甚た多からず吾人三
たび此の地に遊び三たび此の歎を發せざるを得ざりき
夫れ日本の運命が將來益々南に向つて膨脹するを利とす
べきは殆んど舉國民の認承する所なり而して若し其の運

動が實地に活現し來るの日は鹿兒島の地は實に南方經營のポイントたる幸運を擔ふもの乃ち鹿兒島人士が今よりして之に對する諸般の設備を計畫すべきは洵に當然の務めにあらずや而して吾人は想ふ六百年來社會より隱遁したる九州の別乾坤を査討して之を世人に紹介するが如き復實に其一たらずんばあらずと

明治三十二年二月於九州日報社

少 陵

鹿兒島土産序

詞友錦江漁長は達文明識の士なり、余と相會ふ毎に文事を高談す、今回書を寄せて鹿兒島土産を著はさんことを告ぐ、余豈に序なかるべけんや。

凡そ書を著し之れを世に公よせんこと、難は即ち難なりと雖も、文士の快事業なり、而して文事を以て世に樹つもの、時よ或は必要よ迫られて、一卷の書帙を立ち成さざるを得ざることあり、漁長が今此土産を著さんとす、ほもほも、必竟之れに外ならざるか。

鹿兒島縣は本年を以て、九州沖繩聯合共進會を開かんとす、九州産物は精華を萃めて互に優劣を品騭せんとす、ほなり、物は精人は衆、蓋し百二都城を擧げて、醴集沓至す、ほ所よ任せんなり。

波は瀲灩として櫻島は浮ふあり、雲は驟驟として霧峰乃、秀つほあり、廣袤幾十里、昔島津氏か驍將猛卒を驅りて、竊かに天下よ睥睨せし所、其の地や豊かにして其人や

雄なり、錦江漁長今や之れを文筆に傳て、觀光の客をし
て、是等千古の山川に親炙せしめんとす、其勞や大なり
と云ふへし。
而して時は今此適麗の天地に於て、共進會を開かしめん
とす、此書を編せんとするものも、之れ自然の必要が漁
長を催進したるもはなるへし、
抑も土産は著地は靈を以てして、文は華之れは協はさる
へからず、然らされは、唯に雄美は山川を沒了するはみ
ならず、讀者をして一讀唾棄せしむるに至る、漁長は文
に能にして事は敏なり、其能なるものを移して山川の適
麗を叙し、其敏なるものを移して故事の煙没を闡かんと
す、此書か世人は歓迎さるゝは余の疑はさる所なり、敢
て首卷は蕪辭を陳ぶ云爾。

明治二十二年二月於宮崎新報社樓上

狷 庵

序 言

世は人は多く鹿兒島を説くも、未だ克く鹿兒島は景勝を
説くものなし、南洲甲東と結付られし鹿兒島は人に記憶
せらるゝも、南洲甲東を化成したる天然の風光は、地僻
にして境隔たるの故を以て、未だ周知されず、是れ鹿
兒島の爲め甚た惜むべしとせずや、錦江漁長は能文の士
なり、頃者一書を著して鹿兒島土産と題し、其の名勝舊
蹟の梗概を記して詳かなり、昔者頼山陽の文を以てして
、耶馬溪の勝始めて天下に顯はる今や鹿兒島の風光は漁
長の艶筆に入て世に流布せられとす、吾は漁長に向て大
に其徳を謝するものなり。取敢ず快感を叙して贈る。

明治己亥二月初日

鹿兒島新聞社の屠籠の傍にて

小 菘 記す

鹿兒島土産序
 杜牧落第して江左を過ぎり羽廟よ謁し項王の頸を撫して
 嘆して曰く項王にして天下を得ず杜牧にして解元たる能
 はす眞よ千古の遺憾と謂ふべきなりと
 鹿兒島の地山紫に水明に遙巒近水青螺晴灣綉時綺錯一幅
 青綠山水の畫を展するの趣あり而かも此の佳麗の風光を
 して未だ世に紹介する者なきは豈に千古の遺事に非ずや
 余竊に惜む吾友錦江漁長は風流の恨人錦心繡腸之を覺城
 文壇の妖魔と云ふも可なり頃日覺城の勝概を記し參訂斟
 酌一部鹿兒島土産の著あらんとす覺城の風景を記するに
 漁長が得意生花の筆を以てす所謂錦上花を添ゆるもの此
 編の出る當に紙價の貴さを加ふるのみならず寔に昇平の
 風調たるに愧ざらんとす昔者八瓊逸客余潛心の板橋雜記
 に題して曰く此記須らく零金箋を用ひ烏絲欄に畫き洛神
 賦を小楷に寫し裝ふに雲鸞縹帶を以てし之を蛟龍篋中に
 貯へ薰するに沈水迷迭を以てし風清く月白く紅豆花間に

開ひて之を看る可なりと吾將さに移して此の著に於て期
 せんとするなり之を序と爲す

明治三十二年乙亥二月於鶯花粉院

紅豆詞人

凡例

一本書は其体裁にも印刷にも又記事にも十分の注意を加ふべきの處著者塵事の爲め南船北馬孔席の暖なるに暇あらず爲めに草稿の儘之を印刷に付し而して成功期日の切迫せる爲め校正をもなすの暇なく遂に製本するに至れり文辭拙劣に加へて此の不体裁あり一層の拙を加へたり何れ再版の日を期して文辭を修飾すべし讀者幸ひに諒恕あれ

二各地の詞友に托して序跋の寄贈を請へり未だ其惠賜を領せずして遂に上版す且つ最初の考案と上版の分とは計畫全く異れり故に序文と相違するところあり看客亦た幸ひに諒せられたし

三鹿兒島縣管内の名勝舊蹟は殆んど枚舉に遑あらず而して紙數と時日の爲めに制限せられて稿を終へて割愛せるもの多し何れ再版の日を待つて補正すべし

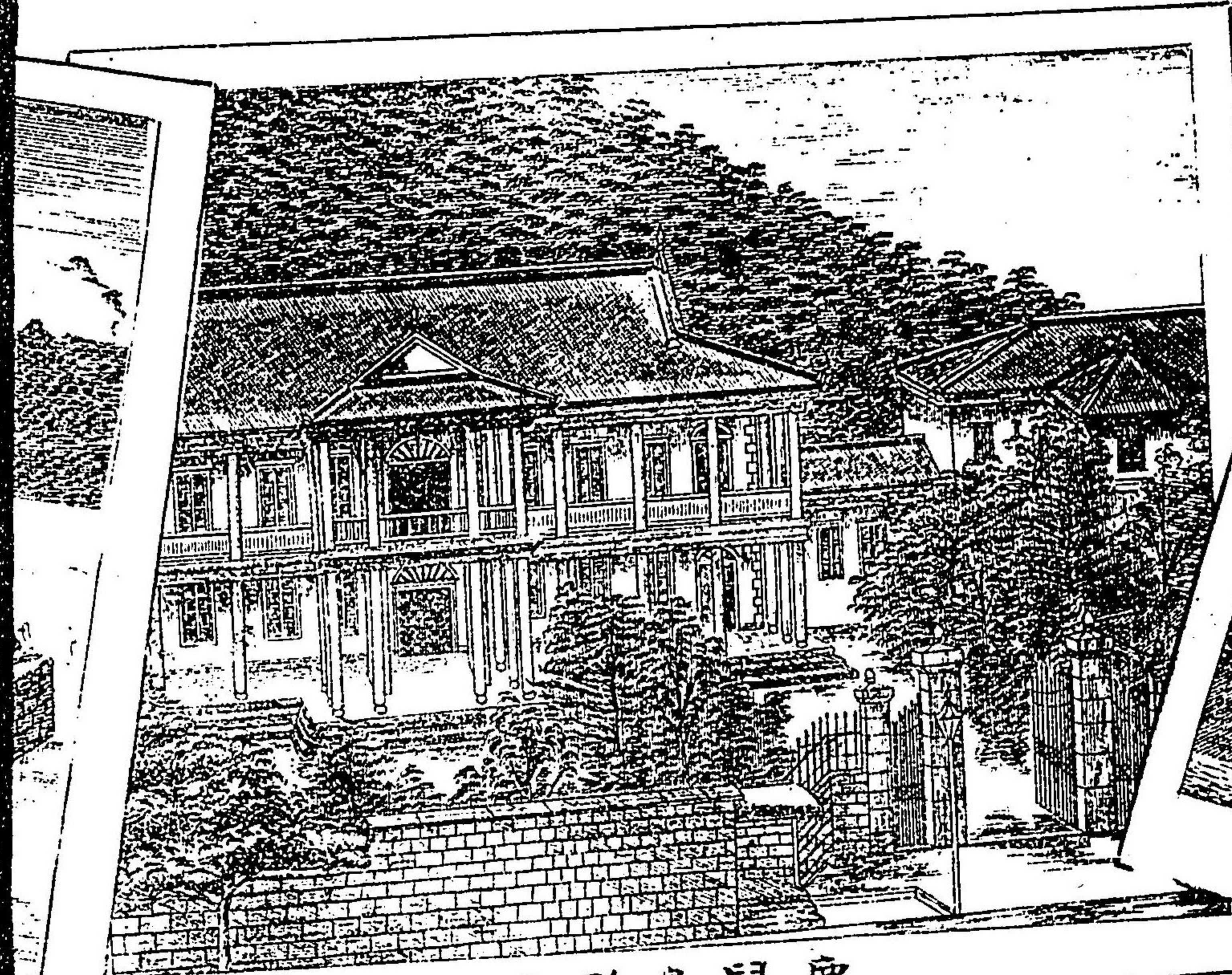
四本書中特に共進會の記事に就ては本縣技手某君の非常

なる厚意に依り其材料を蒐集するを得たり茲に特書して其厚意を深謝するなり更に繪畫に就ては柳澤文花堂主人の熱心奔走により鮮明なるものを掲げて讀者と俱に此の風景に親炙するの思あらしめ又鹿兒島活版所の日夜植字に従事するありて迅速に出版するを得たること亦た著者の謝するところなり只た最初全文に總仮名を附する筈なりしも成功期日の急ぎし爲め俄かに省略せるは窃かに遺憾とするところなり

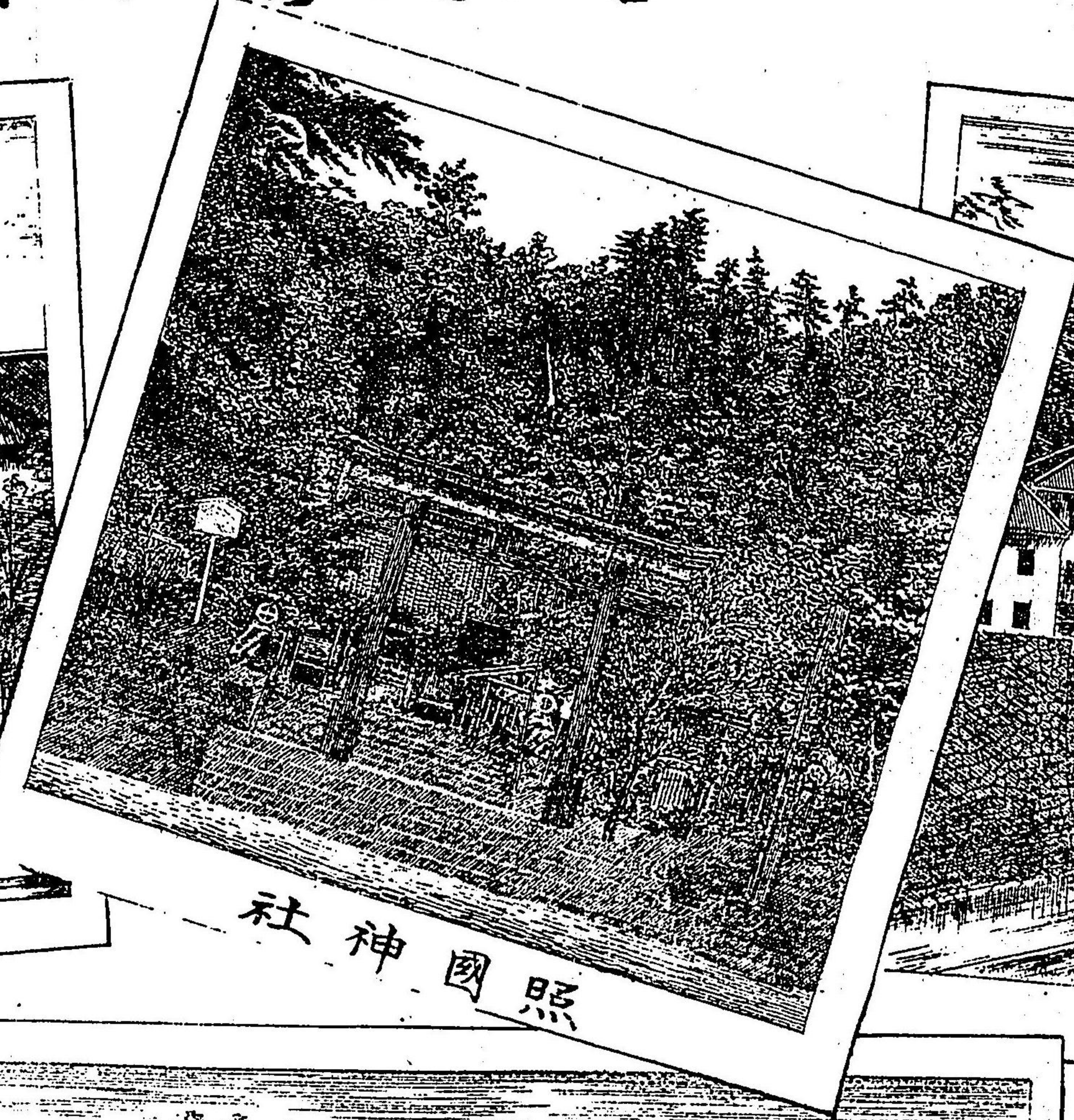
明治三十一年二月

編著者識

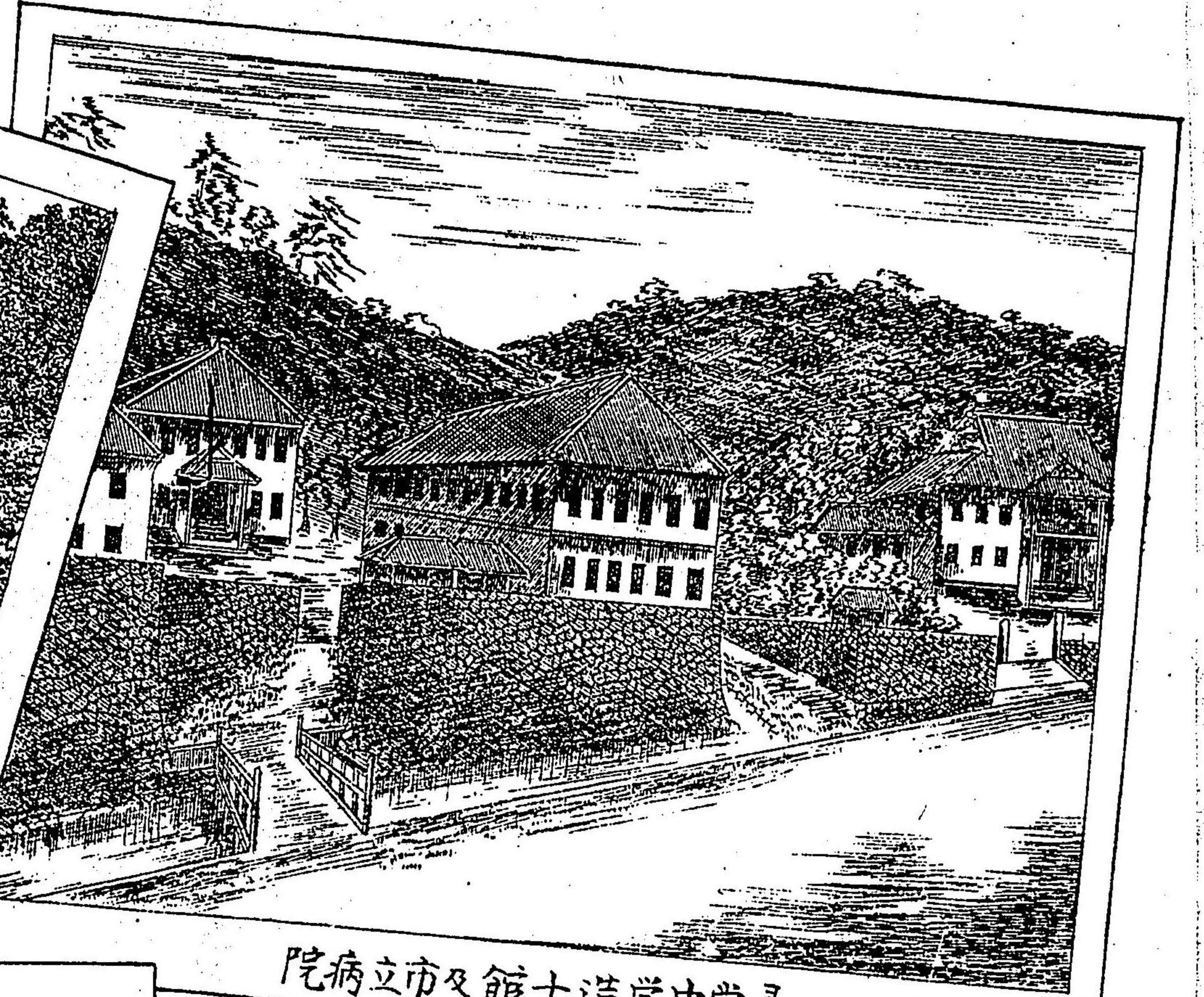
鹿兒島勝景



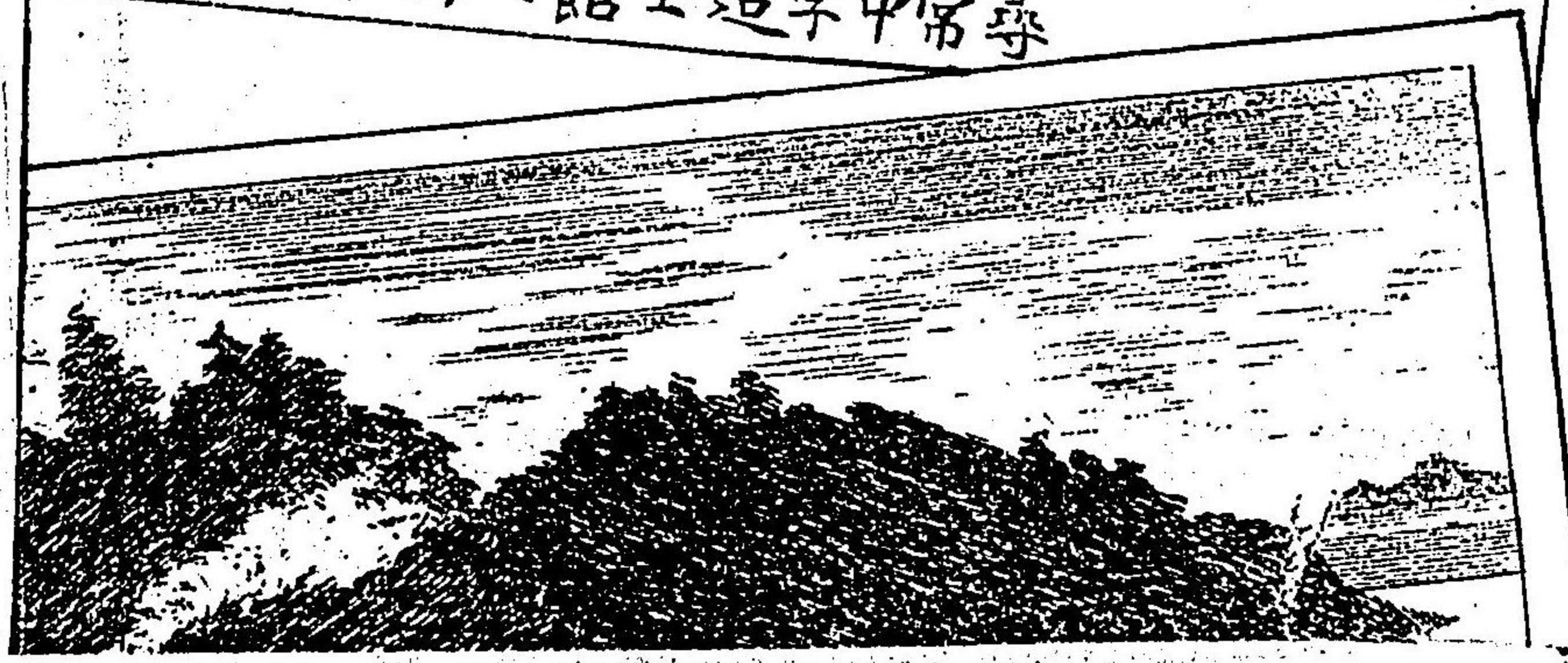
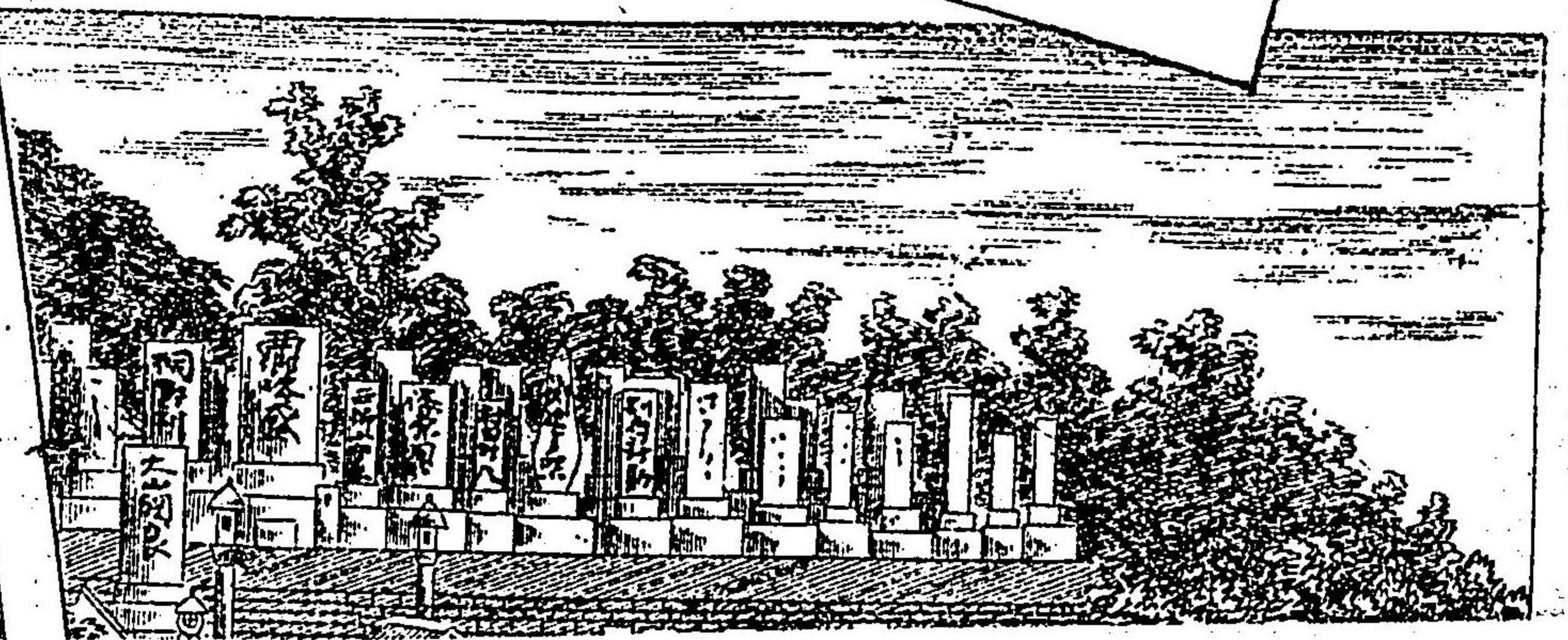
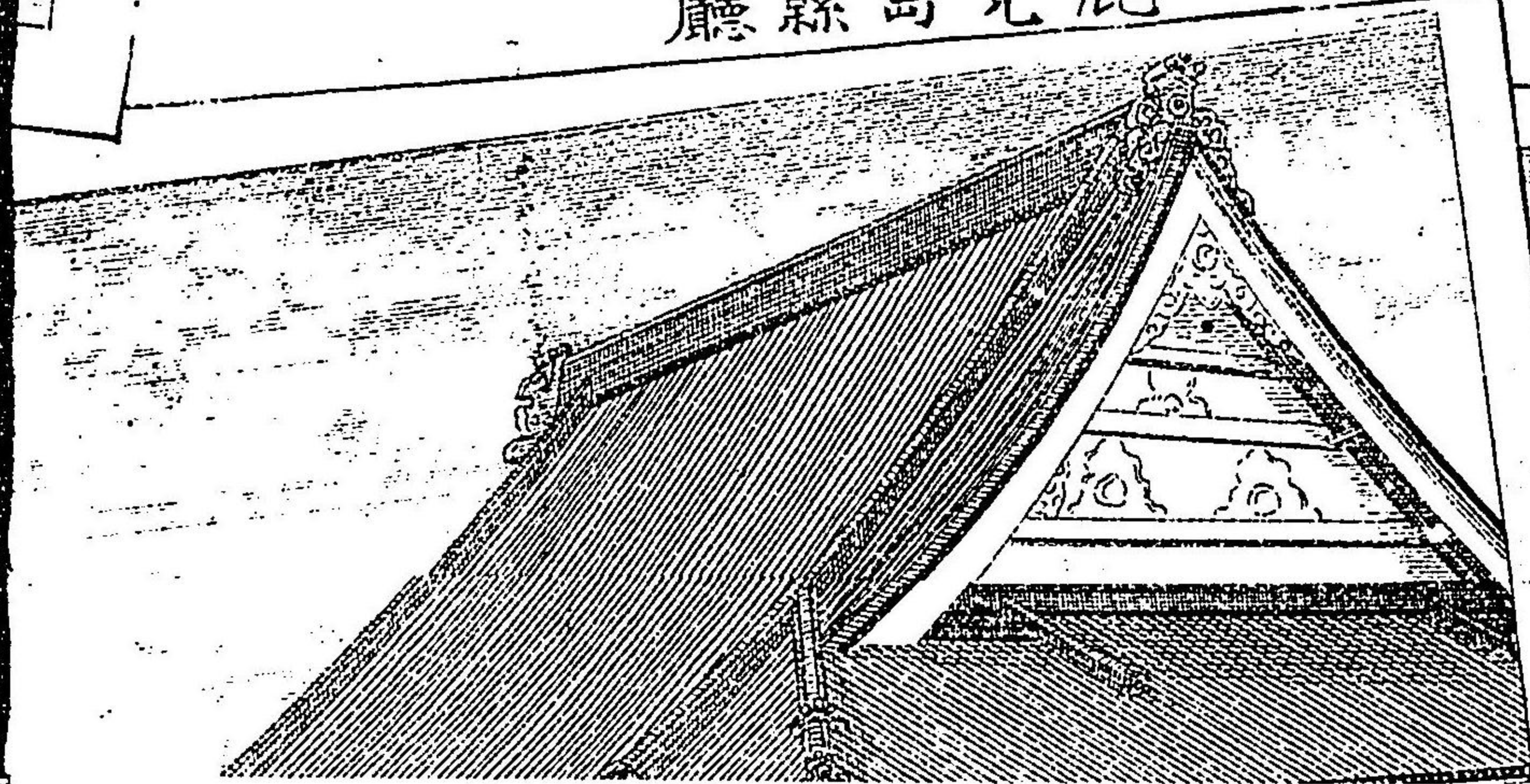
鹿兒島縣廳



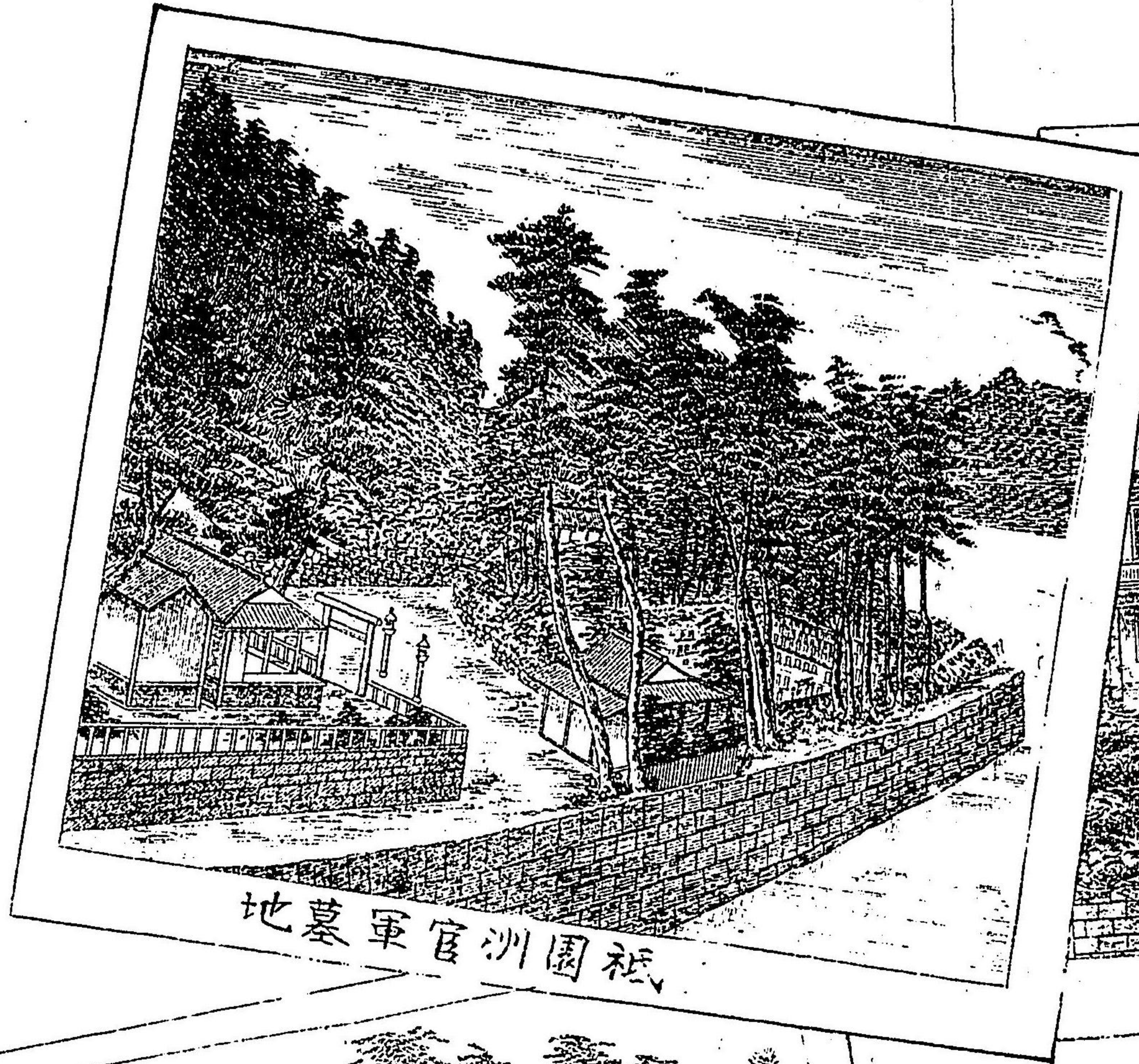
照國神社



尋常中學造士館及市立病院



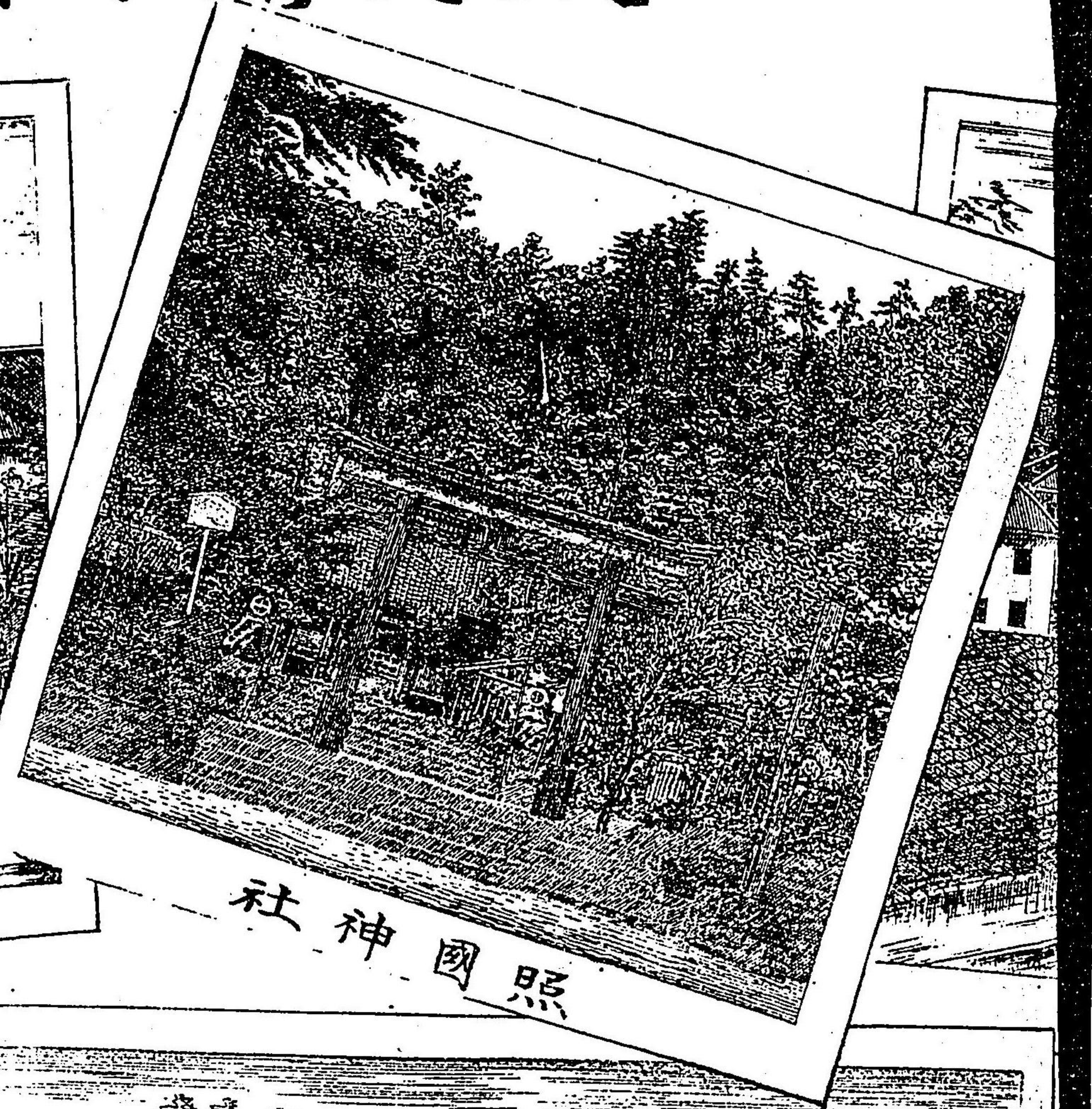
鹿兒島勝景



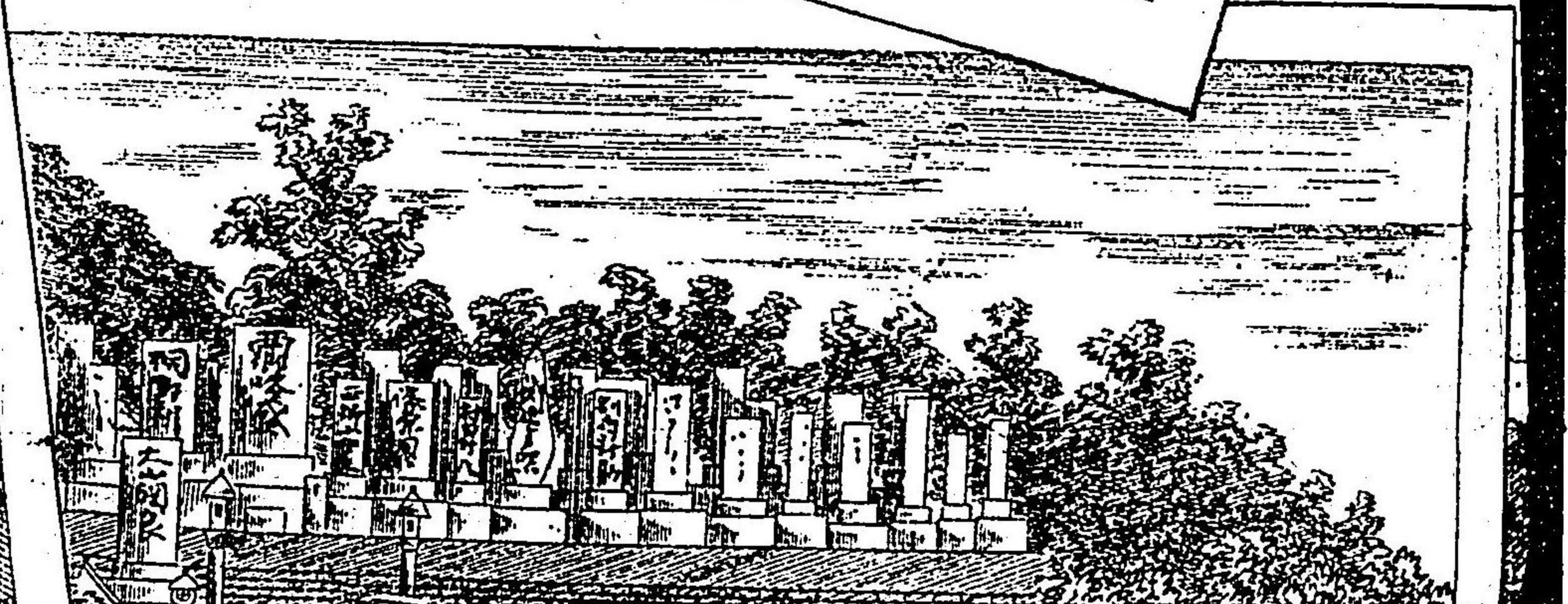
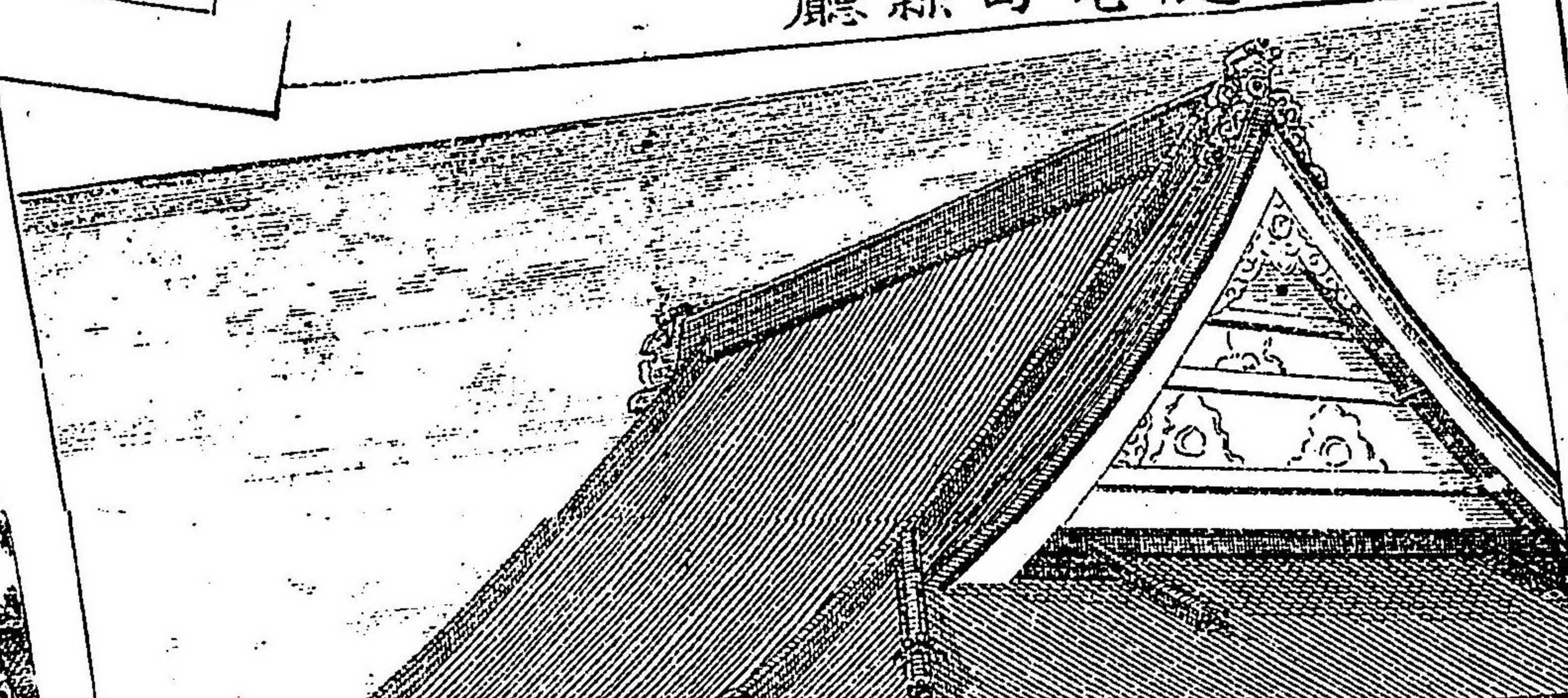
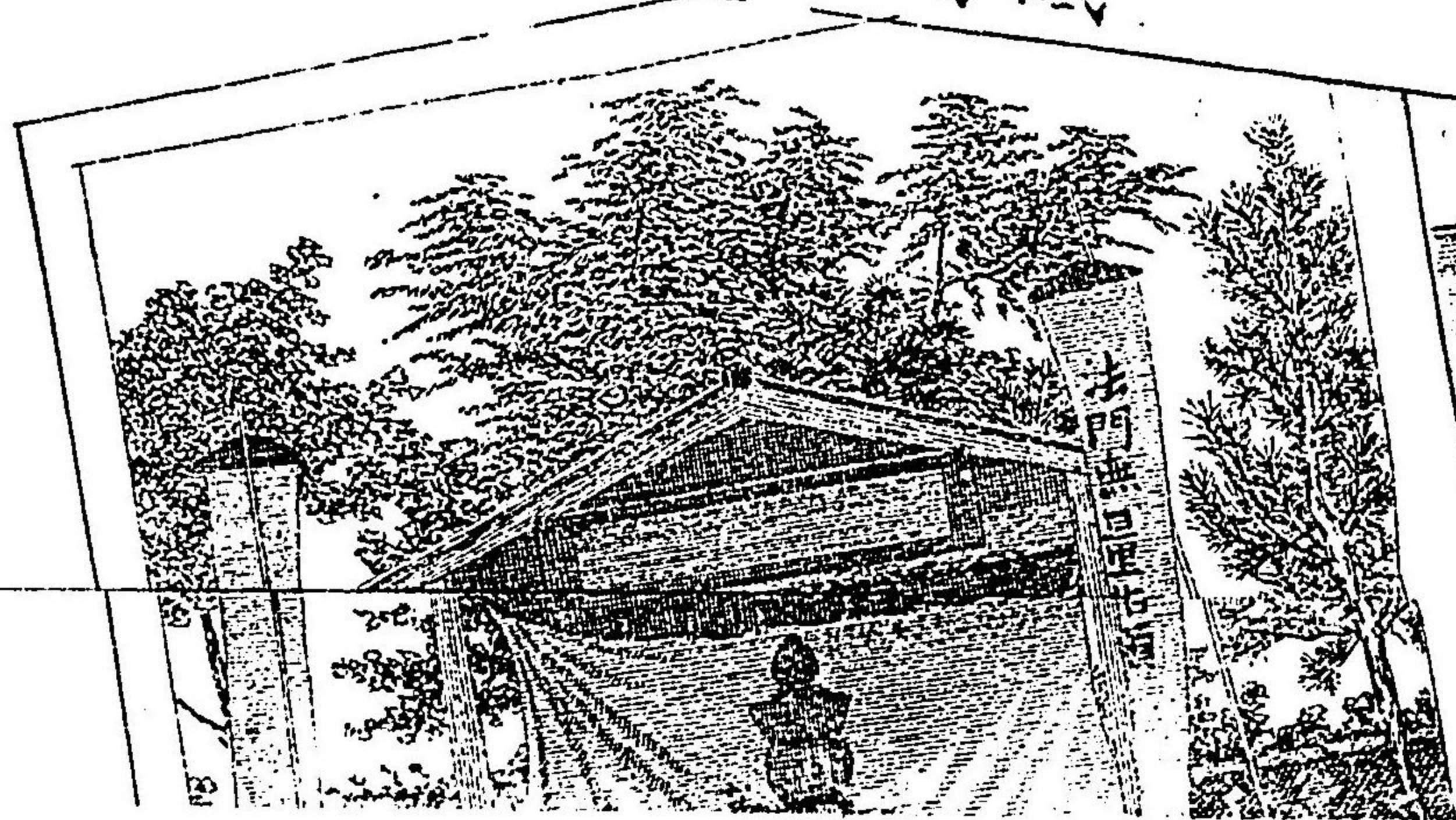
祇園洲官軍墓地



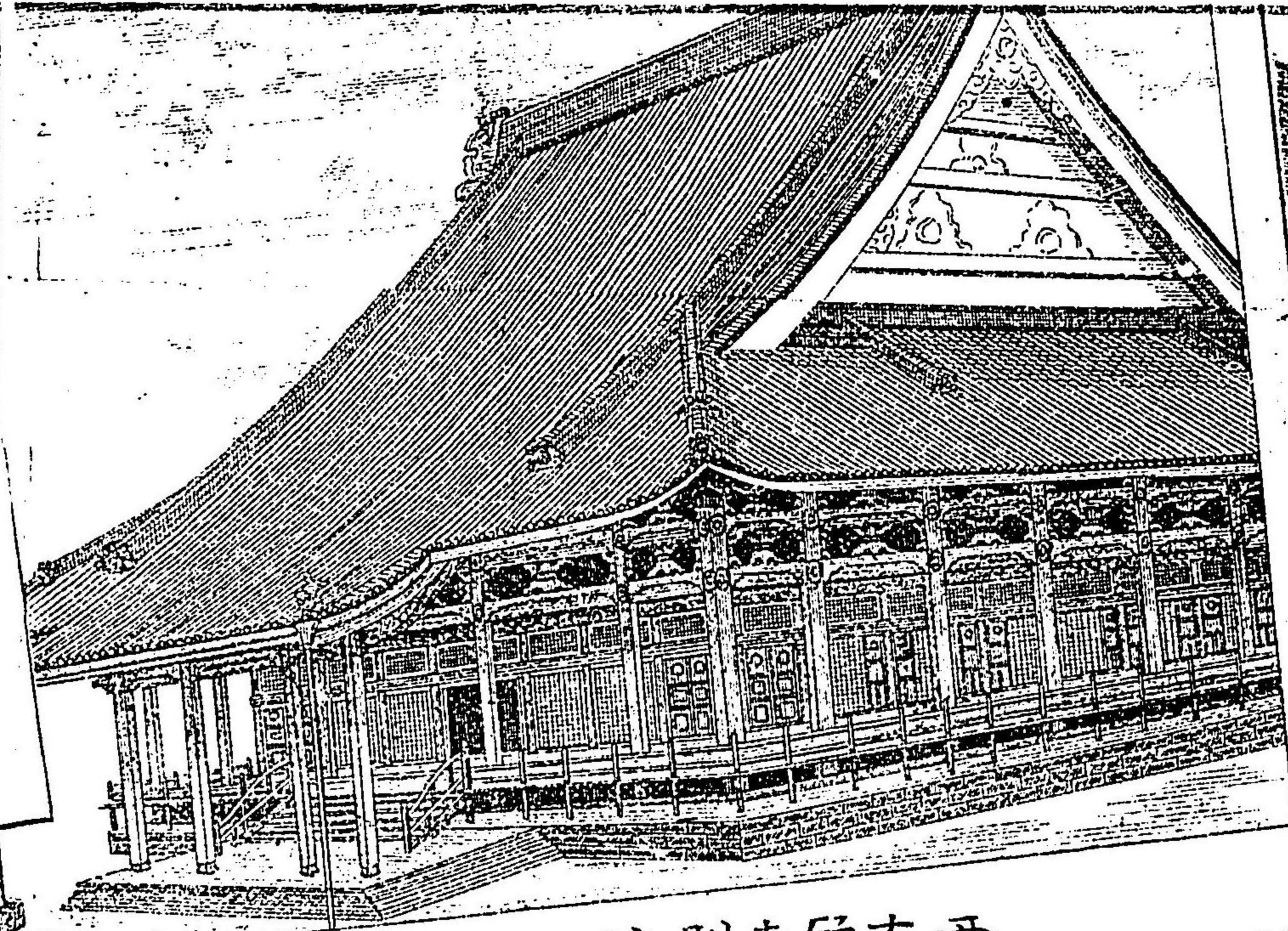
鹿兒島縣廳



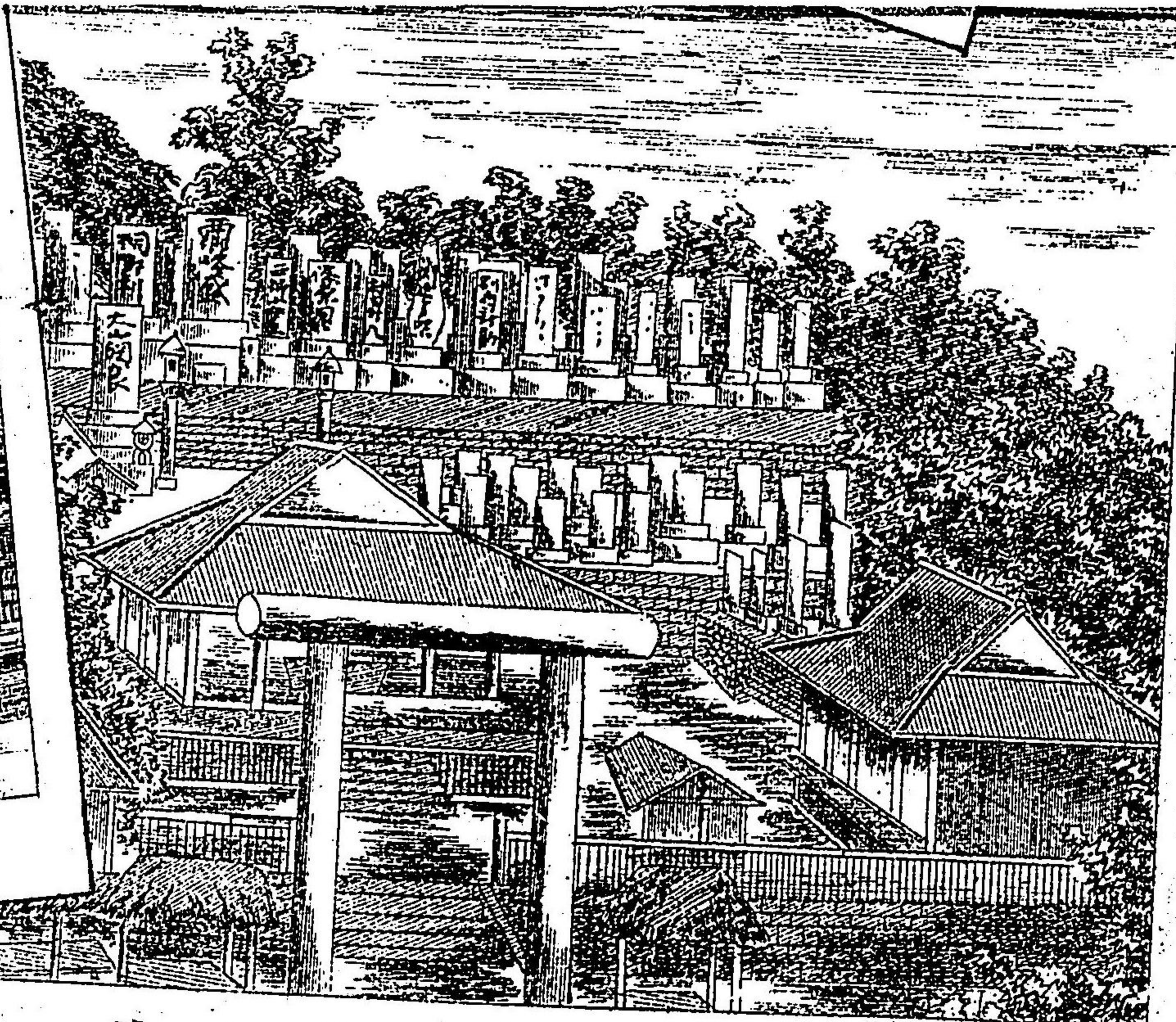
照國神社



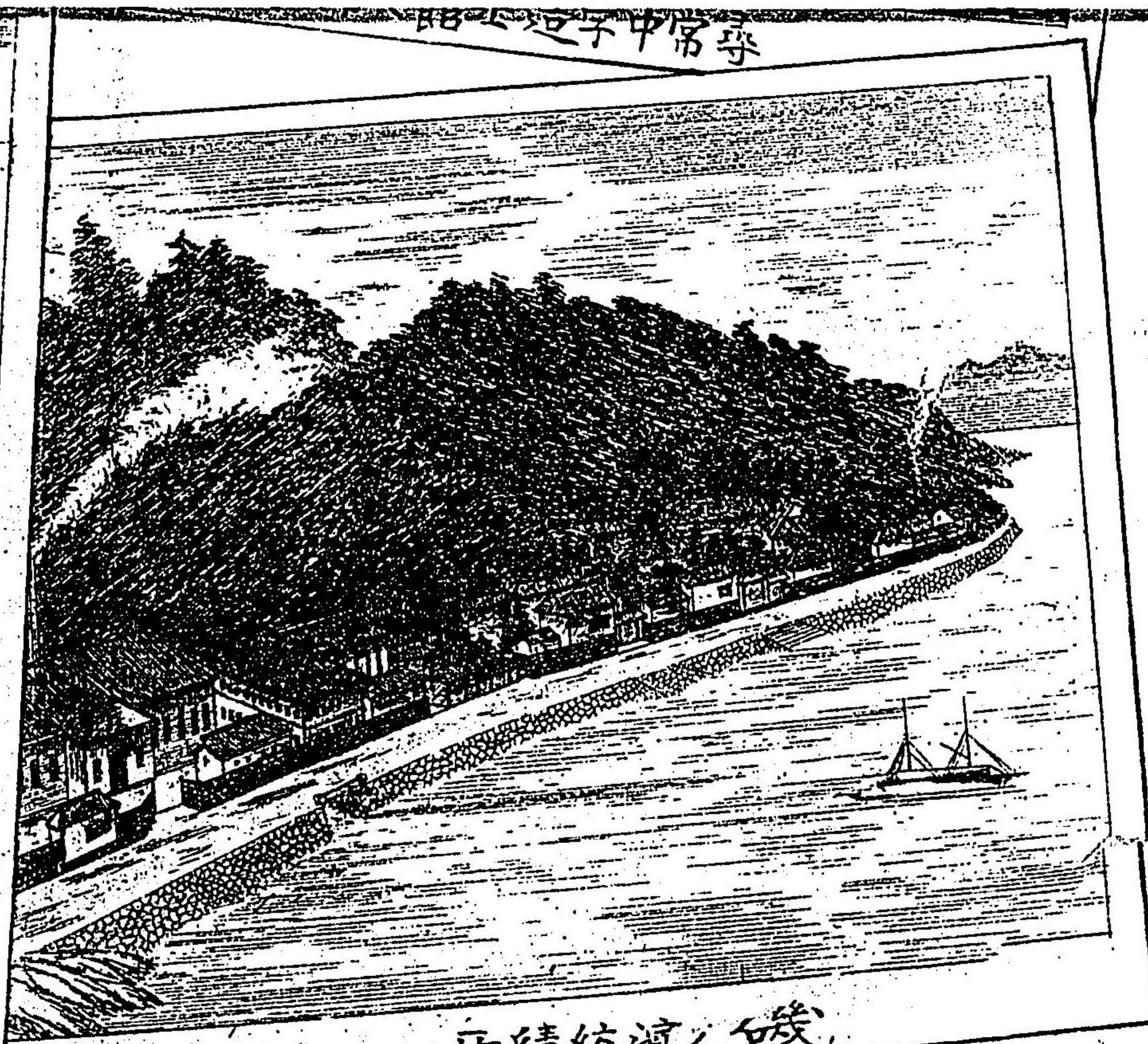
昭公延子中常尋



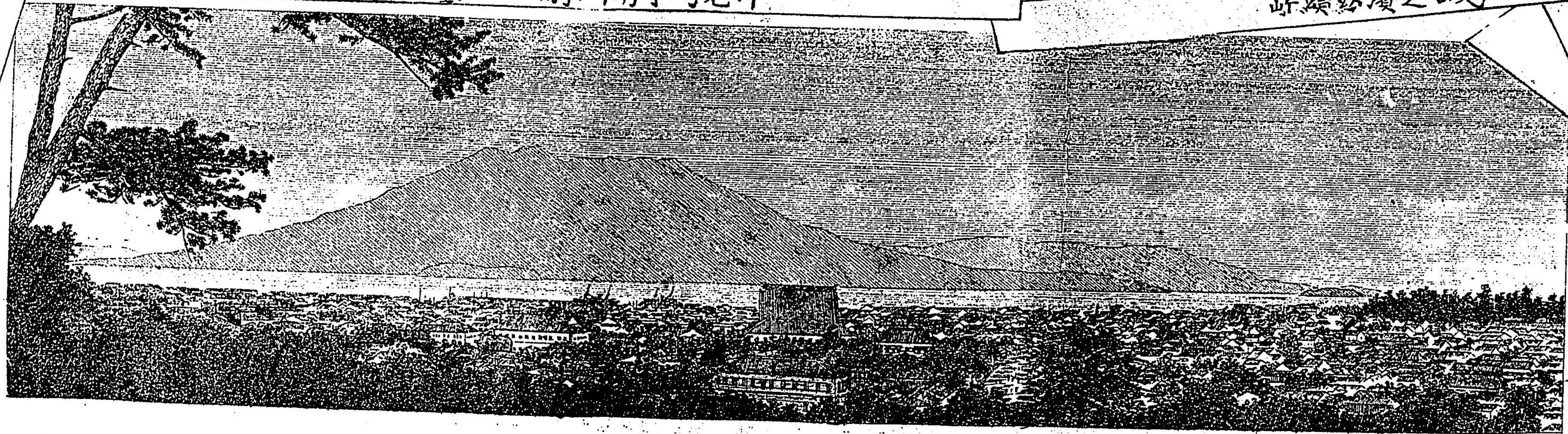
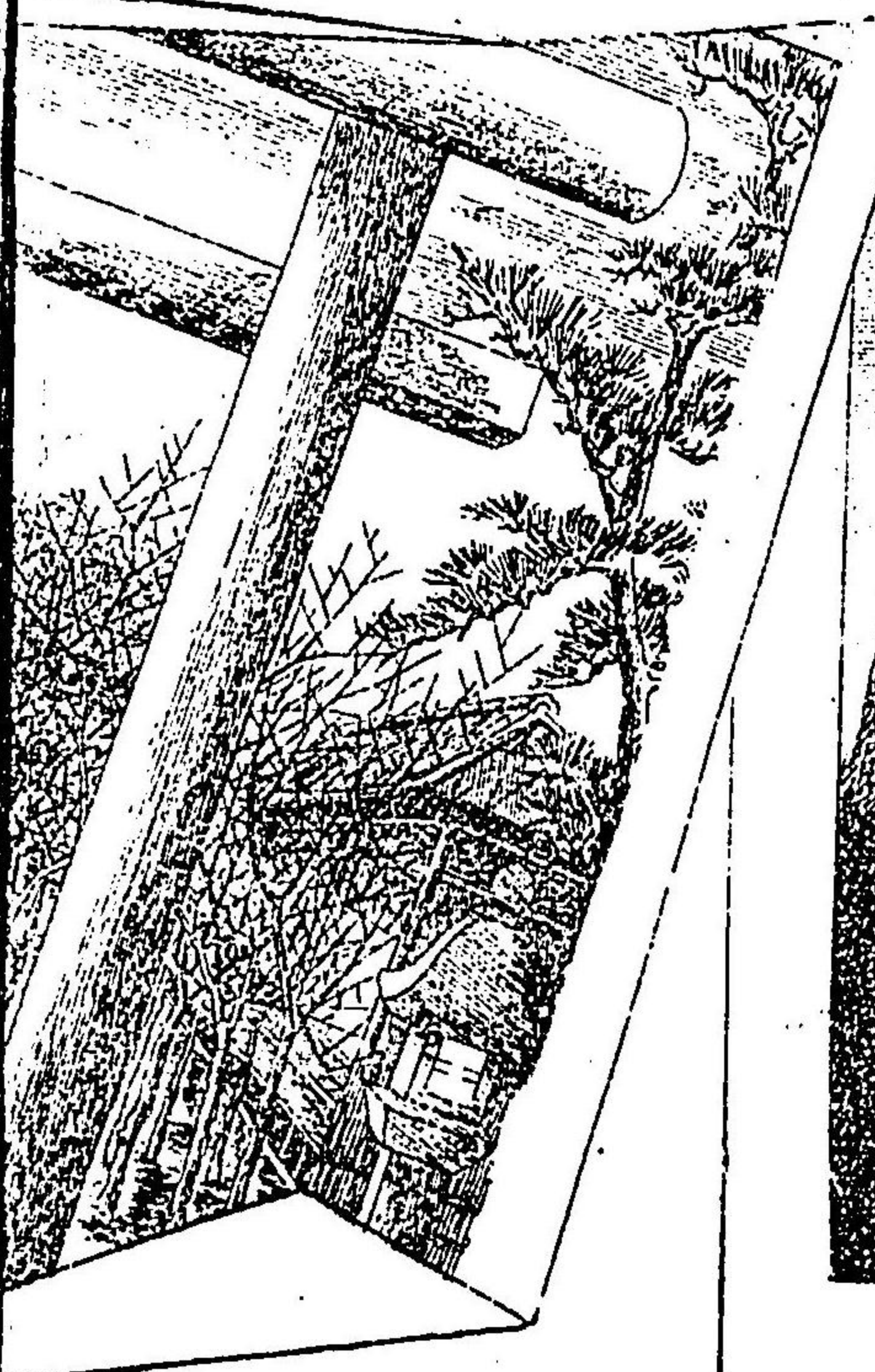
院別寺願本西



墓之下以翁州南寺明光淨



所績紡績之磯

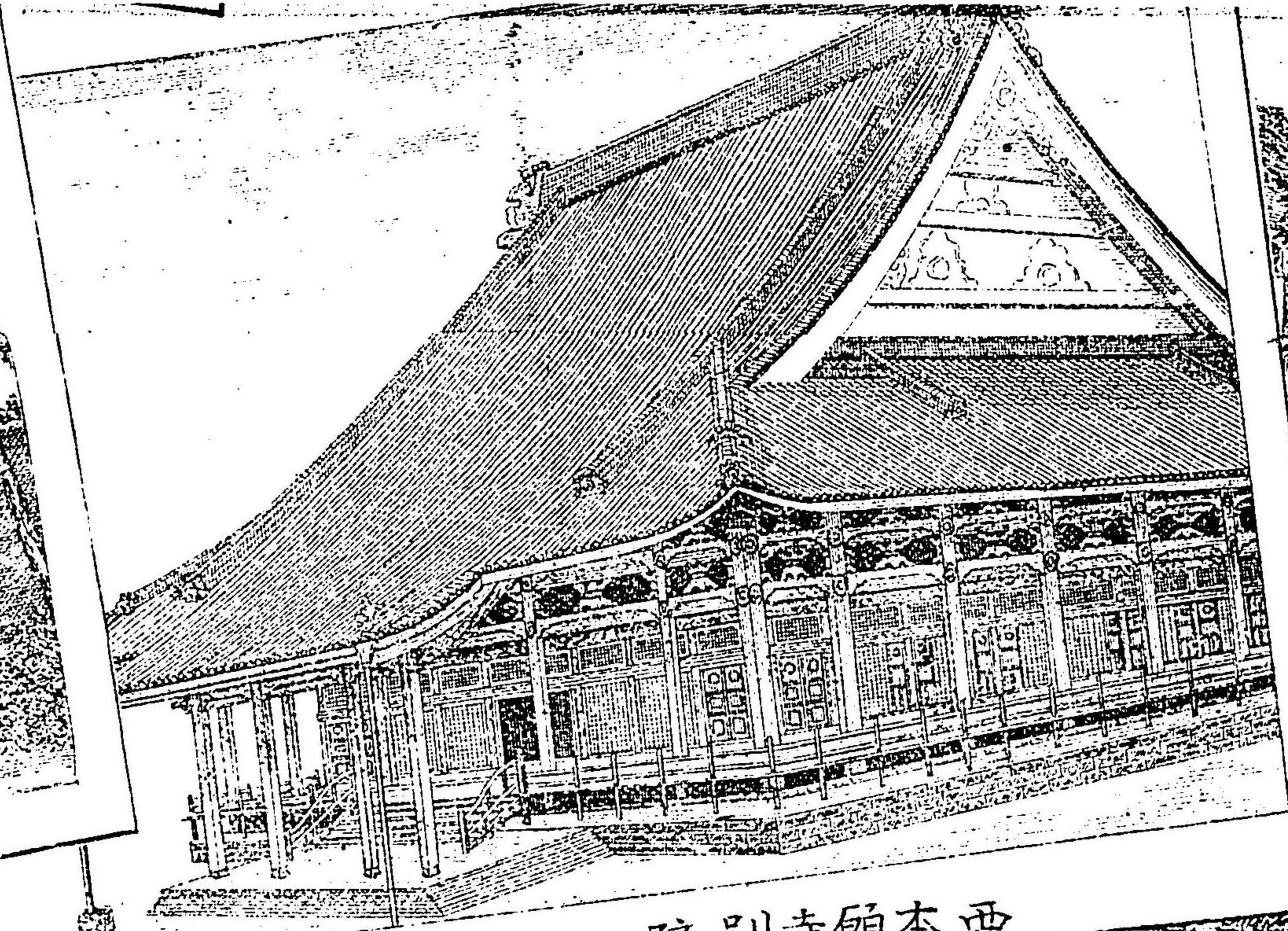


街之市島兒廠

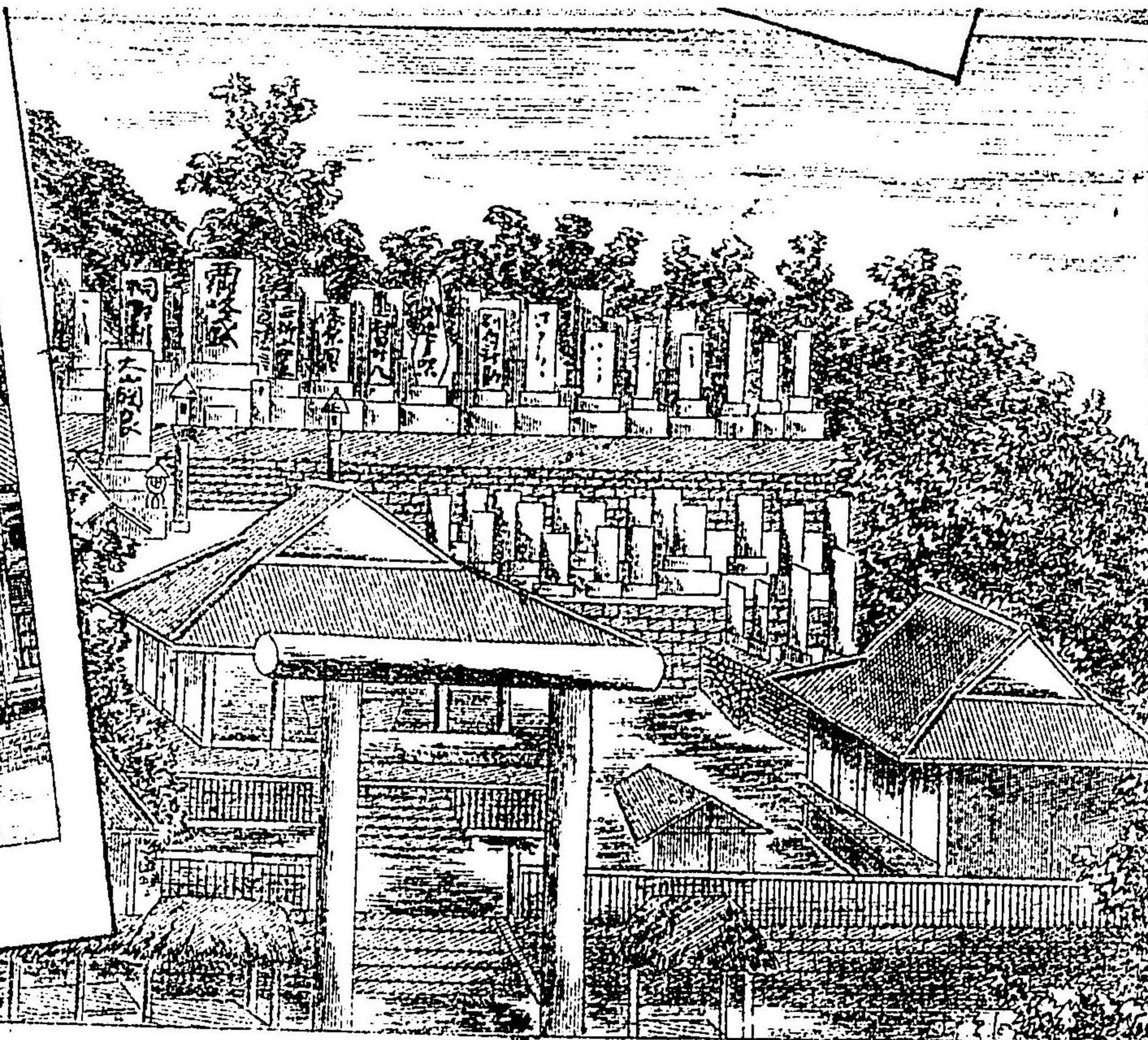
— 即西堂花文口將相中景報臨 —



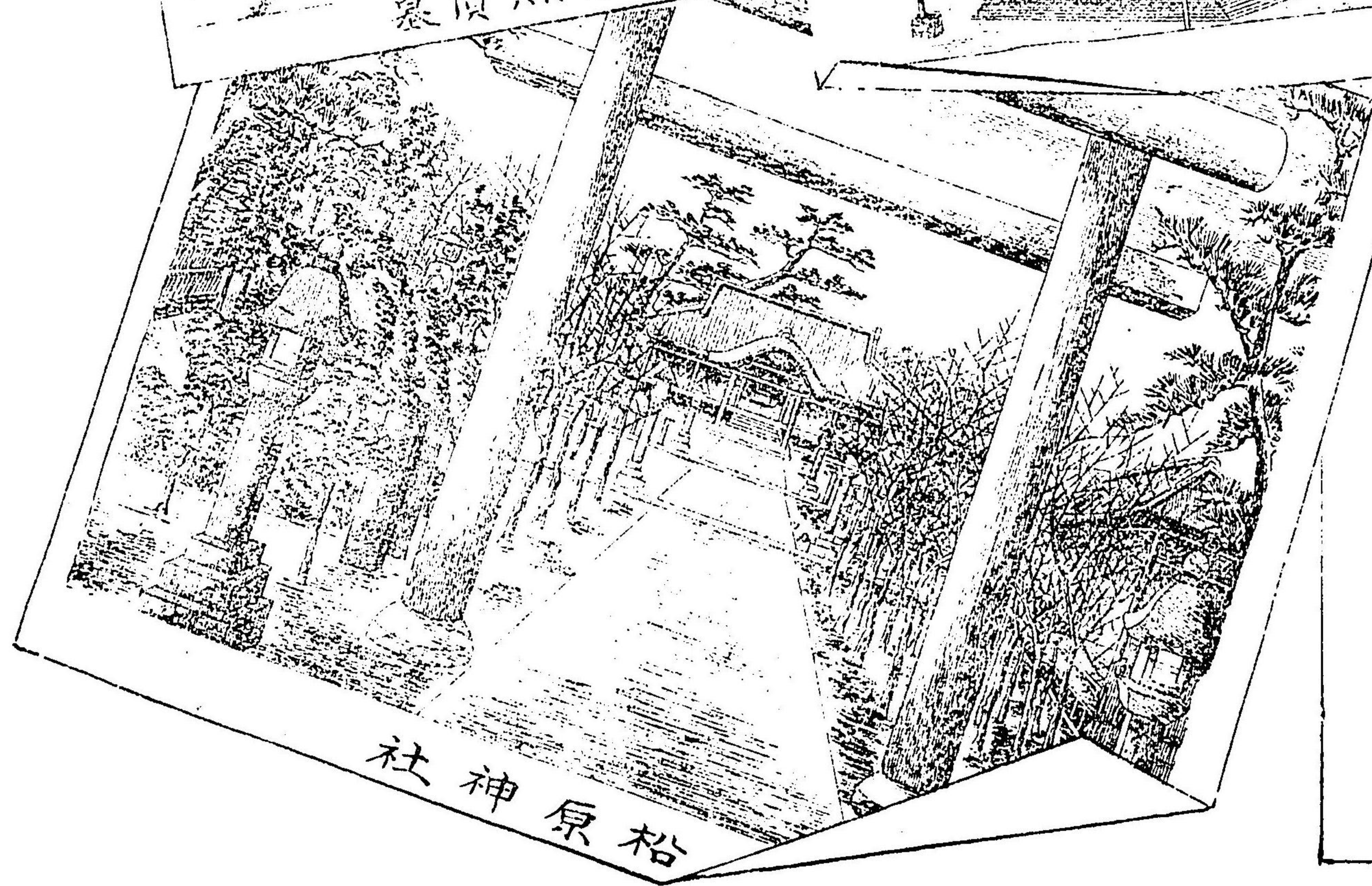
僧月照墳墓



西本願寺別院



淨光明寺南州翁以下墓



松原神社



鹿兒島市街之畵

鹿兒島土產

目次

緒言

名所舊蹟

- 錦江
- 城山公園
- 照國神社
- 俊寛堀
- 西郷南洲翁誕生地
- 天保山
- 最大乘院
- 常安峯島津忠義公墓
- 祇園洲
- 田之浦
- 磯菅原神社
- 榎木馬場冷泉
- 石埭
- 櫻島
- 岩崎谷
- 西本願寺別院
- 松原神社
- 大久保甲東誕生地
- 不斷光院
- 近衛水
- 島律久光公墓
- 鳶石
- 稻荷神社
- 三船
- 玉里島津公爵邸
- 唐湊冷泉
- 鹿兒島縣廳
- 鶴丸城趾
- 東本願寺別院
- 僧月照墓
- 洲崎
- 琉球館趾
- 淨光明寺南洲翁墓
- 鶴江崎神社
- 多賀山
- 大磯島津公爵邸
- 心岳寺趾
- 第四十五聯隊兵營
- 慈眼寺紅葉山

○波ノ平

○七ツ島

◎柳巷花街

◎物産

◎諸官衙學校

◎銀行會社工場

附 録

◎第十回九州聯合共進會案内
沖繩八縣

◎本會の由來

◎出品の概況及出品一覽表

◎縦覧人心得

◎會場案内

◎販賣店

◎協賛會

◎共進會開會中開催の諸會合併其日割

◎鹿兒島市各地間里程表

◎乗合馬車客待所

◎市内人力車賃錢表

◎各地馬車賃錢表

◎審査長審査官
事務員並ニ事務所

◎賣約所

鹿 兒 島 土 産

紅豆詞人校閱

錦江漁長編著

緒 言

鹿兒島の、古來佳麗の地と稱ふ、山妍はしく、水明かに、風光清絶、春艶、夏涼、秋麗、冬温、四時の勝事、一も佳からざるはなし、砌外の雪漸やく解け、疎影の窓に上ぼるゝれば、芳草魂を返へし、花信序を追ふて、聆蕩春を織る、春風一路、芳草煙の如きの時、麗衣の女兒、翠を江南に摘み、潮痕半暈、清沙瑤に似たるの處、花を簪すの紅隊、貝を浦北に拾ふの情趣、神飛ばんとす、騎陽燄くが如きの時、葛衣、浦頭れ醜樓に就けば、老松軒を蔽ひ、青澹つて雨を作さんとす、欄に凭り展望すれば、白帆風を孕み、速漪皺んで人に媚ふ、翠一弄、鏡影乱れて潮痕白く、鬪聲耳に到る、淺酌一番、願望の間、新月軒に在り、涼颯坐に入る、白露結んで、梧桐葉飛び、秋既に深く、織錦繡、詩材到る處、在り、舊刹に靜寂の情味を嘗め、古刹に幽閑の眞趣を味ふ、若し夫れ、珠簾明月の下、去つて高樓の曲欄に凭り俯して江流を瞰れば、烟波万頃、新潮岸を涵し、金波龍を躍らす、髣髴たる雲端、房顔の笑を呈するものは、開閣の岳なり、依稀たる烟外、雙眉の黛を描くものは、霧島の山なり、峭寒肌に鍼ま、雪華霏々の晨、舟を熨ひ、棹を田の浦に移せば、風に捲

くの雪は、縹亂絮の如く、水を剪るの舟は、浙瀝聲あり、江畔の旗亭に就ひて、瞻望すれば、前岸の屋瓦は、無数の玉峰を呈し、半江の凍流は、一面の玻璃を磨く、若し夫れ、雪月相得るの夕、堤上に歩すれば、堤沙総て瑤を布き、江流銀を露し、風景清冷、畫以て寫すべからざるなり、其他、温泉に櫻洲に浴し、香魚を河頭に賞し、或は淑房閣臺に、金釵橘を劈くの樂、風榭月樓に、銀盆瓜を浮ぶるの興、白門秦淮の勝概あり、更に附近の勝地に至りては、回汀曲灣秀峙綺錯、嵐光水色映帯して詩趣を傳ふ、龜井道載翁、明月隕露、波に細瀾あり、松に微韻あり、鳥影依稀淡として無らんとするの風興を咏じて曰く

誰家絲竹散空明。孤客凭樓夢後情。皎月南溟波不駭。秋高一百二都城。

錦心繡腸、人をして清風明月の夜を想はしむ、頼山陽の行李蕭然、薩摩に入る、阿久根を経て、

危礁亂立大瀾間、決皆西南不見山。鵬影低迷帆影沒。天運水處是臺灣。

淹留幾句詩を賦して曰く

鹿洲逆旅歌

蛟唇氣蒸萬家煙。對岸岳影壓城關。京貨靈珠列肆鬻。賈舶中雜球琉船。來吾津樓御行李。九月葛衣暑未已。豚肉竹筍旅飯腥。寄身劍肩累跡理。舉止便像認攝商。語言嬌軟知京妓。蹴踏自憐一書生。食時爭席出爭廢。萬里誰迫爲此行。逆境未可說不平。開啓行篋抽書讀。堆薪撐檐尺五明。

薩摩詞八首

郷兵團結百餘區。帶箭人交荷鉞夫。茅舍權籬差整肅。家家多種淡娑姑。

路過朝鮮停獲孫。空陶爲活別成村。可憐直得扶桑土。造出當年高麗盆。」

相逢南客市鄺間。官語牙牙雜漢蠻。御墨京毫請價直。自稱兩度入燕山。」

櫻山突立海灣曲。一碧琉璃擊響環。鹿子城中家幾萬。無慮不納紫犀顏。」

海門山外矯鸞鷗。鷗背長天一色秋。憶得劉郎舊詩句。烟波深處是琉球。」

一枕仙遊萬斛珠。賺他王子伴華胥。中山應有龍陽泣。唯愛扶桑五色魚。」

南客醒顏北客紅。幾杯琉酒太醇醲。更驚下物尤難獲。十月盤飧見窺龍。」

螺青瀾書兩脩蛾。六拍齊謳白水歌。誰謂銀簪學時樣。兒家要壓髮髮髻。」

前兵兒謠

次至肝袖至腕。腰間秋水鐵可斷。人觸斬人馬觸斬馬。十八結交健兒社。北客能來何以酬。

彈丸硝藥是膽羞。客猶不屬嬰好以寶刀加渠頭。

後兵兒謠

蕉衫如雪不愛塵。長袖緩帶學都人。怪來健兒語言好。一操南音官長噴。蜂黃落蝶紛褪。

倡優巧鐵劍鈍。以馬換妾醉生肉。眉斧解剖壯士腹。

爾來幾十年、能く此の勝概を傳ふるものなし、嵐光水色、此の晴好雨奇の小品題には、幾代の詞客が、錦心繡腸を傾け盡すも蓋し一辭を替する能はざる爲めか、余や不文を以つて此の山水を對して品備す、山靈水伯其拙を憐むるべし、而かも自から烟霞の宿痼を癒するものあり、

名勝舊蹟

附神社佛閣

此の秀麗の地、先づ何れよりか筆を染むべき、先づ鹿兒島附近より説かん、

錦 江

烟波滉漾として碧膏を湛えたるごとき此晴灣を錦江と云ふ、錦江は鹿兒島港のあるところ、長街波光に涵し、而に當るの櫻島萬橋を護る、地の關西有數の都市にして、古への雄鎮、陸には百貨を峽め、海は千帆を簇らす、鉄輪波を蹴つて魚龍潛み、柔櫓波を碎ひて倒影動く、江に靜波をくして、微瀾あり、若し夫れ夜闌けて天地寥廓、金波激瀼として日隔の遠鬱淡として無らんとするの光景は筆すべからず、畫すべからざるあり、

櫻 島

錦江灣中碧漆の盤上苑として香爐を据ゆるが如きものを櫻島とす、一に向島と云ふ、島に山あり櫻島岳と稱す、形ち六摺屏風を展匝するが如し尤も奇古、日の東嶂に出づるの曉岳影紫に、月の天邊に到たるの夕、島影淡し、好齋の時峯頭噴烟の縷の如きを見る島中有村、古里、燃、麻、黒上、乃四温泉あり、四時來り浴するもの多し、

望 向 島 賦 詩

釋 桂 庵

万頃蒼波白鳥濱。中流向島一由旬。櫻窓穩坐回頭見。宛是廬山面目真。

櫻 島 四 詠

僧 不 石

春

南海灘頭獨登天。紅霞青靄單相連。光莫訝八光映。滿島杜鵑花欲燃。

夏

一朶奇峰甚可憐。雨餘著色碧於天。景光自是參雲外。巖下趁涼多小船。

秋

突兀巖巖絕海堆。滿天夜氣益崖蒐。山容何似老人瘦。露出手袖秀骨來。

冬

滿山白雪冷乾坤。万丈寒光射浪痕。借問諸峯誰得似。丹青獨露玉崑崙。

月雪のさがめのみのは櫻島

浪のはさよるゆふへあかつき

鹿 兒 島 縣 廳 山 下 町

石垣鐵柵方幾十武、宛然一城廓の觀あり、構内園庭瀟灑、竹樹幽古、而して四時花あり、一池の水明淨、鱗介架を吹いて、險囁聲あり、池畔に遙拜所あり結構素朴頗る雅致に富む、老松あり偃蹇して鐵枝横さまに簷を掠め影を涵す、泉聲松籟相和して頗る雅趣あり、門を出で左に傍みて上げれば城山公園、

城 山 公 園 山 下 町

城山は一ふ鶴嶺と云へり、形ち白鶴の天邊に舞ふに似たるを以てあり、懸崖削立、蒼空を凌ぐ、攀つべからず、山頂老松古柏、鬱茂天を蔽ふ、夏猶は寒きを覺ふ、山腹ふ公園地あり、眺望極めて可、茶亭三四、亭榭を架し、紅粧の女子、榻を置ひて茶を賣る、榻に凭りて下瞰すれば、東阡西陌、千門萬戶、庇を接へ、甍を連ぬ、市ハ洗洋の錦江に伏す、江を隔て、暮雨の雀屏を立つるが如きものは櫻島なり、夕陽晚鴉の時、風帆欹仄、相趁ふし行

くものは、白濱の歸帆か、遠山近水、指願の中に在り、風光誠に絶佳、山の左腹に岩崎谷あり、

岩崎谷 山下町

岩崎谷は、丁丑の戦場にして、南洲翁の入つて、彈丸を避け遂に没せられし洞穴の在る處あり、石を以て垣とし。古梅二三株を植ゆ

百戦無功半歳間。首邱幸得返家山。笑儂向死如仙客。盡日洞中棋響閑。孤軍奮闘破圍還。一百里程壘壁間。我劍已折吾馬斃。秋風埋骨故鄉山。

葛蘿蔓々、岩華幽香を吹ひて、洞壁蝸篆亂塗す、秋荒れて草黄に、鴉鳩の落暉に啼くの時、烟淡くして霜白く、蝙蝠の低月を飛ぶの際、行客をして惆悵徘徊、去る能はざらしむるもの

鶴丸城趾 山下町

城山に接して鶴丸城趾あり、往古上山城と云へり、觀應年間、上山某の居城せし處あり、慶長年間、島津家久公、城を築ひて移らる、後ち代々茲を居城とせらる、城の鶴嶺を負ひ、錦江に臨み、山河襟帯して、要害無双、當年龍騰虎踞の意氣を想見するに足る、今其城壁を存するのみ、尋常中學造士館此中に在り

照國神社 山下町

故從一位島津齊彬公を奉祀は、公は賢明の君にして薩王聖人の譽あり夙に意を海外の事物

に用ひ、日本旭旗の制定も公の創意に依る、祠殿老朽頃年改築の議あり、公の歴史の世人の知悉するをよる茲に贅せず、祠に隣して鶴嶺神社あり靖獻神社あり、

西本願寺別院 東千石町

東本願寺別院 新町

宏壯美麗の殿堂街衢に俯するものを本願寺別院とす、共に欄欄梁柱壯麗精妙看るもの神を忘る、

俊寛堀 御着屋

鹿谷の會合、相國の怒に觸れて、俊寛の疏黃島に流置せらるる、籠を此地に解けりと云ふ、數年前一小池を存せしも、今埋めて跡を一片の石に留む、谷楓橋傳つて鹿谷の樂府あり造語殊に奇左に録す、

鹿谷

楓橋 谷 虎

酒酣瓶倒燭火碧。滿堂賓主相欣懽。只道好兆天所降。寧知禍機旦暮迫。相國一怒氣更驕。索獲釣黨瓜蔓抄。檻車當路刀光出。諸公頭上風蕭蕭。鬼界之島何渺漭。寧知山莊委榛莽。一鳥不啼山更幽。亂泉激作句句響。

松原神社 松原町

島津家中興の英主島津貴久公を祀る、苑内梅樹數百株、冷雲月を罩めて玉釵影さからんとし、香風骨に沁するの時、萬梅花底を徘徊せば殆んど身の人間に在るを忘るるものあらん

僧月照墓 松原町 相國寺前にあり塔に靜溪院と刻せり、傍の石燈平野國臣の題するところの和歌あり、風淋雨打今まや墨跡見るべからず、

西郷南洲翁誕生地 加治屋町

大久保甲東誕生地 全

共に甲突川の東岸に在り茂樹修竹、碑を立て、之を標す、文は重野成慶乃撰するところ、名成りて短褐郷閭に歸り、酒を置ひて歡然として、故舊を話せし當年の感懷果して如何、兩雄共に今や下界す、黄泉の下、臂を把つて歡然相話するか、抑亦た漫罵するか、

洲 崎 盤屋村(大門口先)

甲突川の下流にあり、沙歌に潮高からず、咫瀾尺波、取次に寄せ來り泊々として沙と私語するが如し、干潮の時遠退數十町、奇文を描いて回る、春時拾貝の子女、群を成し、裾をかかげ、衣を約くし、清澁影顯す、水雲滄蕩の間、髣髴春花の榮たるあり、川を隔て、天保山に對す、

天保山 甲突川下流

長洲一帯、東に向つて舒ぶると十數町、下には白砂あり、上には古松多し、松聲瀾語、逍遙の人をして歸るを歸れしむ、今ま聯隊の射的場あり、又避病舎あり、風景を欠くも尙は黄昏罷釣歸來の人、蟹歌蜃語、亦た詩すべく畫すべし、

不斷光院 易居町

淨土宗の大伽藍にして規模宏壯、門の左側に鐘樓あり、是れ時鐘なり全市の人、晝夜是れに依つて時を知るを得、

琉球館趾 長田町

舊時琉球國王以下上國邸宅にして常は親方(紫巾大)といふ官職の者在番せりと云ふ、丁丑の兵燹に罹り、其趾を存するれみありしが、明治三十年鹿兒島葉煙草專賣所を茲に建つ、

最大乘院 長田町

石を以て封境をなし匾して吼獅子窟と刻す、俗に高野山と云ふ、不動明王を養す、門内泉石幽古、竹樹幽邃、淺渠潺湲として聲あり登午靜にして魚龍青萍を吹く、眞に是れ市井の一仙境、

近衛水 冷水町

圍り一間三尺許なる圓き石を井筒に置く、清泉湧出す、冬暖にして夏清冷なり、地名冷水の名是より出たるあるべし、慶長の頃、關白近衛信輔公配されて此地より下回ありし時、硯の石み用しよし云ひ傳へて此名あり、鹿兒島市一半の飲料水は此の水原によれり、

淨光明寺 上龍尾町

淨光明寺には實に曠世の英雄南洲翁以下桐野篠原、其他猛將勇士の塋域あり塋前香華帯、新に吊客の來てて奠するもの日夕絶へず、寺は高さ五尺あり、遠山近水、指顧の中にあり、翁夫れ偃臥欠伸、佳城の中に傲笑するや否や、塋前今ま樓宇を修す、翁の木像を安置するところあり、

常安峯 上龍尾町
島津忠義公の墓あり山上古松茂生、風景頗る可、登臨すれば市井村落、途遠近螺指順の中に在り、

島津久光公墓 池之上町

福昌寺趾に在り、境特に幽、賽するもの徘徊願望、當年の偉業を想起す、

鶴江岬神社 春日町

寶永三年島津吉貴公の新築するところ、祭の日文旦を賣るの商估多し、趾の左に神馬厩あり、大さ常の馬に同じ、神采生るが如く、奔逸せんとするの勢あり、

祇園の洲 清水町

永安橋を渡れば、老松幾百尊、鉄枝狼藉、千様の趣態あり、其下に神廟あり、八坂神社と稱せり、丹楹粉壁、廟前は官軍墳墓乃地、松露隕滴、是れ雨かと疑はる、此れ地、素と祇園臺場の在りし處、文久三年六月廿七日、薩藩の士、生麥に英人を傷けしを怒り、英艦の來つて寇する、番士奮撃、敵大敗して、船を捲くに暇なく、捨て去る、臺場路荒れて、今ま繞かに殘礎を存す、潮聲、鯨聲、洲畔渾渾、尙は當年叱咤の聲を聞くが如し、

鳶石 清水町

八坂神社の北、多賀山の下に在り、大さ屋の如くにして、形ち鳶に似たり、銘あり、鹿府祇園洲口に石あり、其形頗る鳶の爰に止るに類す、號して鳶石を稱す、肩高さ一丈五尺八寸、頭垂れて西に向ふ、背地を去る六尺六寸、尾地に附き盤踞地を占む、周六丈

三尺、亦た城下の一奇觀あり、而して斯に在る、蓋し幾千萬年矣、府學教授山本正誼初めて之れが銘を爲る時に文化敗元の歳也銘に曰く、
奇也此石。初隕自天削成何巧形狀類鳶大如活預出在江邊迎來送往。幾世幾年。文化甲子銘辭彫鐫。不磨不滅。終古是傳。

多賀山 清水町

祇園の洲の上にある一岡樹なり、趾あり伊井諸命を祀る、島津久光山伏鷲頭不動院に命じて、近江國大上郡多賀の神靈を迎へ、日之少宮に擬ひ、天正七年己卯二月六日此所、神社を建立す、石燈幾十級、石欄苔蒸して古香人を吹く、長松の下に倚つて展望すれば、鹿兒島の市街雙眸に入り來る、煙波を隔て、遙巒青嶂夢より淡く、眺望の佳鹿兒島第一と云は

浦の田 清水町

祇園の洲に接して、磯に通ずる邊を、田の浦と云ふ、風光明媚、山を負ひ海に臨み、一帯の沙路明淨のところ、清嵐來つて搖曳す、路に傍ふて酒旆相望む、青螺幾點、盤上敗菘の依るべきさまが如きものは、沖の小島なり、黛眉幾個、天際倒扇乃懸るが如きものは開闢の岳あり、櫻島唇顔笑はんとし、朝靄紫に、暮靄白く、秋帆仄帆、夕陽を負ふて歸る、此乃地盛暑なく唯だ涼秋あり、鹿兒島に八景あり、而して此地之を領せり、

櫻島白雲 前濱行舟

洲崎平砂 南林青松

製陶所あり、薩摩燐を出だす、

築地晚潮 島陰漁火

松室鐘聲 多賀晴嵐

稻荷神社 清水町

池田屋の後、高丘ふ在り石によりて祠を建つ、石磴幾十級、馳望極めて佳、脚下寸人豆馬、前は櫻島呼べば響へんとし、高隈海門の遙青を看る、初日雲霧が出るの時、晚暉晒網を射るの際、詩趣の特に多きを覺ふ、神武炳焉深く虔敬の念を發し、四時賽するの子女多し

大磯 鹿兒島市吉野村に跨る

田の浦に接し、國道遶逶として、軟砂白く細波碧し、後ろに峰巒を環らし、前ふ櫻嶋を見る、大隅の踏山は縹渺として夢に在り、風來りて岳影皺み、環水亦た搖く、大磯は一名を仙巖洞と云ふ、仙巖園茲に在り園ハ島津公爵の別館にして、今の島津公爵邸あり、萬治年中島津光久公の建るところ、重豪公、勝景を撰び、仙巖十六景と號す、清人の詩を徵し、石に刻して園中ニ建つ、

十六景序

左春坊 錢 棨

夫天曰蒼天。海曰碧海。桑扶暈日。若木舒華。斗柄乍看其東指。宇宙皆春。地維不缺於巽方。山川並秀。乃有薩摩國者。即日本之連疆也。臨以碧津。迎以險嶮。斜演折木。遙峙沃焦。非藉巨靈之擘。偏成海外名山。乍當羲馭之外。便見日邊好景。園惟瀨水。即是瀨洲。巖亦稱僊。何殊蓬島。千万里經遊非遇。十六勝地堪誇。豈不足以壯遊觀供眺覽哉。今此重洋隱波。忻看輻湊之蕃船。官貨交通。爭喚往來之唐客。撫此地林泉。新遠人耳目增邱壑於胸中。走風雲於筆下。荆鬲關妙手。繪出層巒。借願陸奇才。寫成尺幅。於是搜問學士。拈珊瑚以賦詩。選勝文人。含霜毫而得句。春風畫閣。披圖瞻東海之雲霞。

細雨曉應。揜筆揮西園之翰墨。遂使王摩詰即畫即詩。並傳其妙。非若謝興一邱一壑得書其奇也。爰製序言。以辨箇首。歲在著雍涒灘圍余月穀旦。左春坊錢棨。

鳴雨泉

外史 曹 謙 光

山脈通源日夜流。淋々似雨響園秋。烹來石鼎供茶話。七椀遊虛一咲休。

赤松林

雲南學政 吳 俊

虬枝低亞翠成堆。未受秦封次第栽。薄暮擁濤風影動。疑揮月到薩摩來。

騰蛟石

翰林庶掌出知福 宰 刺史 江 琅

雲根拔地幾何年。形肖蛟騰却宛然。千古青蒼冠名勝。每逢風雨似昇天。

香楓巖

經廷講官 戶部尚書 童 詰

春風吹醉早楓丹。夾岸香來到曲欄。此景獨餘海外有。神僊應羨是奇觀。

蕃蕉邱

翰林修撰 汪 如 洋

培成翠碧帶山腰。葉々迎風鳳尾搖。也抱歲寒心似鐵。不驚飛雪響蕭々。

修竹徑

史部右侍郎 順天學政 金 士 私

玕琅千万立成林。細路通人幽境深。傍午不知過亦日。清涼慣透愛吟心。

荻蒿叢

翰林院編修 苑 來 宗

歷亂秋風影不齊。含煙和露隔花溪。莫嫌寂寞蓬蒿逕。慣遣高人遠托栖。

葡萄架

翰林院編修 加 一 級 嚴 福

漢使西飯味共探。移栽嘉種遍東南。結陰成架初添竹。珠帳章龍護碧嵐。

以上仙巖園中八景

菅神廟

御史李系

巍然神宇白雲邊。靈爽憑依別有天。洗淨塵緣留好景。楓香蕉色寺門前。

櫻花詠

大守王文治

張家紅粉擅風流。圖畫天然到線洲。好賺漁郎成問訊。一溪春滿東海頭。

龍洞院

承宣布政司王昶

天平遙對院門青。四月寒生古樹林。嘘氣成雲迷洞府。蒼苔冥漢瑣層陰。

飛鳥越

大學士翟璜

灰徑垂空界碧山。人依飛鳥試躋攀。紅塵不到芒溪底。徐度松雲幾壘關。

朝夕池

主事顧宗泰

群峰環抱一泓秋。水落水高早暮流。正合倦園人佇立。果然身已到瀛洲。

四練洲

侍郎蔣元益

雲羅霧縠影相將。疊雪輕勻帶水鄉。倚倩白魚拋玉尺。量來應有幾多長。

天平山

翰林院編纂梁同

高峰儼與碧霄齊。矗立當空万象低。絕頂徘徊天關近。何須更上步雲梯。

海門山

侍讀學士彭紹觀

海門兀峙鎮洪濤。能抗前津風怒號。万里乘潮客出入。玉鯨隱々與金鼈。

以上仙巖園外八景

菅原神社 全所

大磯松ヶ平に在り、貞享三年光久公の設立するところ、廟外二老松あり清陰滿地、技幹偃

塞す、蓋し五百年の物、寒嵐翠微、人の衣袂を染めて青骨に入らんとす、梅樹十數株、綠萼紅瓣、槎特材に奇、此の地眺望佳絶、清陰に依つて茶亭あり就ひて憩ふべし、茶を啜つて靜坐すれば、松聲潮聲坐に滿つ、

二 船 鹿兒島郡吉野村

大磯より加治木に通ずる道に浴ひ半里許りにあり、此地亂礁尤も奇瑰、大石犖角急潮盤桓して色藍よりも青し、廟外老樹枝を交ひ廟窺す隙露空翠人を青殺す、盛暑舟して來り、車して來り、萬斛の涼味を掬し、夜月を踏んで歸るの士女多し、

心岳寺趾

鹿兒島郡吉野村

文祿元年七月十八日島津金吾歳久入道晴蓑自盡の地あり、今、平松神社と稱す、歳久は島津貴久公の第三子なり、沈毅果斷屢武功あり、秀吉の薩摩を征し和成つて歸るの時、義久に書を贈つて歳久を殺さしむ、歳久遂に龍ヶ水に自刃す辞世あり曰く
晴蓑めが玉のありかを人間は、

いさ白雲の末とてたへむ

歳久の事蹟士人の夙に知るところ、此の地棧棠多し、地幽邃、風烟低迷の時は尤も吊客をして悲ましむ、祭日賽するもの傍午絡繹廟廊に凭つて當年の事を語るを聽けば人をして肉動き髪豎つを覺えざらしむ、

以上は鹿兒島縣在所より多くは左に属するものにして、以下は右に在るものを掲ぐべし、

榎木馬場冷泉 鹿兒島郡伊敷村

新照院の對岸にあり、囑望の美なしといふも、泉あり浴すべく、夏時重障盤水、丘浦遙村、稻花香あり蒼々然として、一望際なく、畫圖猶は若かず、楳葉紅を帯ぶるの時亦た可、小亭三四、女あり酒を賣る、

島津公爵邸 全郡全村

城山の後、疎松の下に粉壁彩瓦の一大邸あり之を公爵島津忠濟公の邸とす、俗に玉里邸と稱するものはれあり、

第四十五聯隊兵營 全 所

公爵邸に隣して白亜の洋館數棟、田圃數町を劃して聳ゆるものを第四十五聯隊兵營と爲す、練兵場亦其隣に在り、六軍の常兵皆を貔貅、幾箇の將校悉く英雄、兵を練るの時縱觀するもの沓至す、此地亦た風景に富む、夕陽落日の時暮烟深く罩め、朝暾初出の時丹靄淡く彩る、此の時何れ乃遂よりか曉々喇叭の聲を送り來る、

石 埭 全 村

石埭は河頭とも云へり川内街道に沿ひ甲突川の上流、二里斗りにあり、冷泉あり効驗多し、此地寂幽冥遠にして香魚に富むを以て、春夏之交、一浴一醉、陶然として半日の快を買ふもの多し、

唐 湊 全郡西武田村

古昔は海濱にして唐船此に繫泊せりと云ふ、今田地とされり温泉あり鹿城の子女青を踏んで遊浴する者多し、

慈眼寺趾紅葉山 鹿兒島郡谷山村

地幽邃にして斷喝殘礎僅かに認むべし、奇巖峭立、溪水盤桓、大渦水渦、激して潭となり、流れて淵となる、石佛數軀、眉目缺損、跌座して潭に對す、風細々として吹けば、溪聲樹聲堂に滿つ、石貌語なく、閑雲儘々徂徠す、山に櫻樹兩三あり風咏の興を買ふべし、夏は縁陰の古籠に石鼎を敲ひて茶を淪し、涼味を掬とべし、而も青女俱あり風霜を飛ばして滿山乃黃葉紅葉、夕陽に映するときは特に奇觀とす、

波 平 全郡全村

波平は地名あり、劍匠波平正國は此の地の人あり、橋口を姓とす子孫今に在り

八 田 知 紀

劍打波の平より海見れば

ときすましたる色にこうあれ

七 ツ 島 全郡全村

七個の青螺、相依り相離れて、汀には扶疎の松林と壁透の沙路とあり、瀾紫沙白、蟹舍艇莊、風光盡くが如し

千早振神やとりけん七つ子の

八 田 知 絶

その石をこのまける島はも

柳 巷 花 街

鹿兒島の地、妖々燒々に富めり、花紅ひ、柳緑りに、仙洞別に壺中の春あり、山軟かく水暖かに、瓊樓他に浮瓜の興を添ふ、銅雀春を藏す、三千の粉黛妍を争ふ、佳麗未だ必らば二喬をさらざるなり、楚宮嬌を貯ふ、二百の嚙脂髓を圃はす、雨に泣く豈に夫れ一處のみあらんや、烟渚に鶯を尋ぬるの遊子は、一代の風流に矜り、柳塘に駟を馳するの王孫は、五陵の丰采を輝かす、鶯花蝶粉、争ふて小杜の清狂を笑ひ、金迷紙醉、競ふて韋臯の豪俠を説く、酒を呼べば、金樽翠爵、侑むるに金陵の美酒を以てし、醜を召せば、香葉鮮鱗、理するに淞江の鱸魚を以てす、酒闌はにして、陳々々歌喉、越娥絃を按し、興濃かにして、隊々の舞衫、吳姬起て舞ふ、銀箏行雲を過め、湘裙蘭氣を吐く、忽にして酒虎詩龍、談笑湧くが如く、忽にして鬢影釵光、嬌歌海に似たり、一夜深く宴歇み、鸚鵡籠前嬌辭正に熟す、數點衣に暈るものは、痴餘の艶涙あり、鶯鶯屏裡、私語漸く細し、一脈春を醸すものは、巫峽の紅雨あり、已にして、紫山旭日を孕んで、萬象漸やく動き、曉鐘枕に到り、晨雞樓に傳ふ、起つて、衣裳を整頓し、別を序して去らんと欲すれば、夜香馥郁として次に薫じ、吳姬曉に翠み、楚娃暮に盛む、是に於てか、天台の劉郎、躊躇歸るを忘れ、武陵の漁夫、徘徊津に迷ふ、況んや、春時乃煙波は、濃かに春夢を覆し、仲秋の明月は、密に情味を厚ふは、阿誰情天の歌を説く、女媧爾が石を練るを要せざるあり、阿嬌恨海の深を話す、精衛爾が土を哺むを待たざるあり、吁亦た慾界の仙都而して人生は樂國なり、花外仙史は、風流の恨人あり、斯の間に往來し、間々嚙脂の餘香を瀝ぎ、蘭麝の雲煙を磨し、鎖金窩中の秘趣を寫し出す、文字猶泥余や曾て一曲の唱歌を

以て、兩行の紅粉を廻すの才なきも、亦た偶々恨を青衫に寄せ、思を紅豆に繋ぐの僻あり、是に於てか、仙史の著に就き、江南二分の煙月、收めて新篇よ入れ、錦園十里の樓臺、永く風流の本事を留むと云ふ、

與懺花詞人飲于江畔旗亭

紅豆詞人

江南邂逅喜將顛。詩酒尋盟亦宿緣。我久相思夜魂夢。君能快飲聳吟肩。可憐柳瘦湘簾外。解語花開銀燭前。莫是霜飛鴛瓦白。一九冰月漾寒川。

與紅豆詞人飲于江畔旗亭

懺花詞人

灼爍銀燈夜奈何。阿誰着意鎖愁魔。玉簫宛約水腔曲。紅拂銷魂檀衫歌。翡翠簾前憐老月。鴛鴦江上蕩寒波。柔情如此君休笑。一種襟懷與味多。

全 庚 韻

紅豆詞人

醉中奈個恨人何。誰道紅裙是艶魔。翠袖繡香花樣舞。嬌喉度曲玉如歌。麗情欲繫鸞搖柳。綺夢偏憐激灩波。酒醒繡衾添半臂。古江夜雨薄寒多。

柳 巷

朱欄畫廊、市内京亭酒樓百を以て數ふ、熊蟠鴉炙、易牙鼎を調ひ、鶯花蝶粉、文君爐に當る、茲に於てか、金鞭の公子、紅綃無數、争ふて新譜を徴し、鶴駕の恨人、腰纏十万、來つて長夜の醉を買ふ、別院の酒香春一脈、殘燈の釵影夜三更、眞個に銷魂の極、而して個中、璧月瓊杖、麗華の妙舞を測し、金花銀燭、靜婉の清歌を翻し、名の他郷に馳するものを大門口とす、御着屋、公園下、菩薩堂、永安橋畔、田の浦も亦た繁絃清歌、芳醴佳蕙の樓に富めり、今ま個中の消息を傳ふべし、

大門口 松原町

大門口の地、元と山嶺水明の勝に富む、椒房蘭臺、金釵橋を劈くの樂、風榭月樓、銀盆瓜を浮ぶるの興、吳淞の秋、武陵の春、蓋し其物あり、更ニ金迷紙醉の快を説けば、杯を紅樓に呼ぶ、花奴宴を排し、字を翠閣に題す、雪兒墨を磨す、春冷かにして東風肌に沁するれば、肉屏の圍むに逢ひ、醉酣はにして、春筍枕と寄りて、玉山の傾くを扶く、更に山軟水温の興を説けを、長安街上、天高く氣朗かに、蓬萊橋頭、月白く風清く、寒砧數聲、霜を帯ぶるの夕、亞欄に憑つて下瞰すれば皎月波に落ちて、金龍忽ち奔り、江風衣を吹ひて、衣袂仙ちらんとす、漁火數點、暮靄の中に明滅し、岳影一匝、煙波の間に依稀たり、髮の翠を捲くもの、是れ秋時の勝なり、竹多渡頭、渡舟人なく、半江の風雪、鷺鷥低く水を掠め、一灣の蘆荻、袋翁閑に綸を垂る、紗窓深く鎖さし、淺酌低唱、俚歌の織手控衣を歌ふ、是れ冬時の勝なり、春風凍りを解き、芳草魂を返へし、風日美暖、花使信あり江東の梅花、南枝北枝齊しく開くと、窈窕を暗香の間に携へ、醉を江畔の醅樓に買ひ、興盡きて、棹を廻へすの時を忘るゝあり、春光駘蕩、江流逾々碧にして、絲竹曉に徹れ、笑語は花をつ隔るの樓に在り、屢響の迷香の洞に傳ふ、此の中繡屏春を護し、妓と情懷を語る、園池の鴛鴦、亦た應さに妬むるべし、三春の樂事、倏忽にして、夢裡の觀あり、嬌悶數句、梅雨方さに罷んで、前峯翠を滴らす、最高の欄干に凭れば、一桁の涼颺り、洲外より到り、身清く心爽かに、眞に是れ嫦娥を伴ふて、蟾宮に入るの想あり、若し夫れ夜涼しく、人定まり、風清く、月朗かに當る毎に名士傾國、花を簪し髮を約し、手を携へて間行し、欄よ憑つて徒倚し、題襟の句、側帽の吟、曲を度し譜を調ふ、人をして秦淮二十四橋の勝

事を想起せしむるものあり、

- 萬勝亭 青柳樓 松原亭
- 春風樓 玉川屋支店 眞福亭
- 花房樓 角正樓 浪花亭
- 於多福 花月樓 島見亭

御着屋

御着屋の酒樓り、市塵喧雜の間にあり、されば、嬌絃清歌、往々にして、聞ひて眞ちらざるあり、唯り鮮繪の美、價格の廉と以て、顧客の多き、大門口の酒樓の上に居ると云く、果して信あるや、否やを知らず

- 玉川屋本店 池田屋 芳野屋
- 鶴山亭

公園地下 山下町

城山公園地下の割烹店は和洋料理を營む

- 鶴鳴館 保養園 柳月亭

以上は家に妓を置かず樓室尤も蒲酒

菩薩堂

商舖の間に介在して、一箇の酒樓あり、

菩薩堂に隣りし江畔に錦江亭あり、齋藤屋と伯仲の間にあり、風景の勝は遠く上に出づ

田の浦の風光に就ては、前已に説けり、酒樓三四其間に參差す、

風景樓 池田屋支店 柳下亭

永安橋畔にあるは 祇園亭 風月樓

築地妓戸の間に參差たるは 松島樓 月〇樓

花街

花街は、縣内一の築地遊廓あるのみ、築地は城を距る一牛吠のみ、錦江の清波にのぞみ、巨渠を劃して街をなす、彩橋三四、曰く曉鴉橋(行屋橋)曰く長安橋(永安橋)曰く何、曰く何、堤下の碧水は鏡を磨き、堤上の彩橋は虹を架せり、彫欄畫檻、綺絲障窻、眞個は紅樓十里、煙水を籠め、春月半牆、人、花に立つの概あり、箇中の樓臺、二十有余曰く

朝日樓支店 明月樓 梅屋
解心樓 松月樓 新玉樓
柳屋 品川樓 松發樓
東京樓 齊藤屋 日本亭

四海亭 柴山樓 野上橋亭
朝日樓本店 三島樓 若藤樓
萬福樓

娼妓亦三百余人ありと云ふ
夕陽水よ在つて、樹屋影を倒にし、孝行橋上、車聲漸やく高く、曉鴉橋下、舟子初めて歸る、此時や、娼戸掃洒方さに畢り、踏笙細く起る、新粧既に成る、浴後乃了髪は、半簾人を窺ふて、嬌様滴るが如く、媚眼緩く回る、醒餘の芳卿は、曲廊風に立つて、澄眸流れんとす、鐘聲昏を報するに及んで、紅燭千點、蘭燈萬輝、香雲空に凝つて、軟雪欄を壓す、朝暎の閑、燐々として、漢家の金屋よりも麗かに、明月の樓亭乎として、魏氏の銅臺よりも壯あり、夫の錦圍金谷三千里、鶴背楊州十萬錢あるものは、若し夫れ伴を呼び、侶を引き、此の窟に、入れば、晚粧已に就り、態を極め、妍を盡くし、西妃面を掩ふて、尹姫鏡を撲つ、裁紅點翠、嬌態万狀、風姿一ならず、之を眺めば、神仙の如きあり、若し夫れ夜正さよ三更を過ぎ、烟波萬頃、風無ふして、簾の如く、夜色微茫、水鶴渺然、首を仰げば、星斗蘭干、淡月既に西に傾き、首を俯せば、檣影參差と去て流み落ち、蓬燈布點浪に映す、紗障の釵影、已に没して後樓の歌管漸やく稀なるの時、水を剪るの柔櫓、咿軋として聲あり、客は既醉と稱へ、主は未歸を曰ふ、眞個に斷腸の時分、眞個に銷魂の風光、余が翻縷を待たざるべし、

物産

鹿兒島縣下の産物は千百箇あらずと雖も左に其重なるものを略記すべし
 薩摩焼 は陶器中の最古雅あして高尚なるものあり其色淡土色を帯び外部に細かき皸裂の顯はるゝを特質とせり彩るに泥金を以てを畫樣穩雅あして九谷有田焼に比して淡雅愛すべきなり現時盛に海外へ輸出せられ「薩摩」の名を以て内外人の間に玩賞せらる初め島津義弘公の役に朝鮮に赴くや歸らるゝの日に當り嘗て我軍に質たりし者男女十七姓四十餘人を携へ來り慶長八年日置郡の苗代川に居らしむ彼等の中朴興用と云ふもの始めて苗代川に製陶所を開けり後ち始良郡帖佐村、鹿兒島の立野にも製陶所を設けり金海の造りし陶器と古帖佐と稱し今に存するもの價最も不廉なり上記のものは磯の田の浦に移せり今の田乃浦陶器製造所是れなり苗代陶器製造所在りては沈壽官氏其最なるものあり今廿九年中の製造品價格ハ實に貳萬五千圓に及び本年に至りては倍蓰の好涼あり
 砂糖 の産額は縣下大島郡を以て最とす大島郡は縣下に於けるのみならず日本全國黒砂糖産額の過半数は實に此地の産なりとす而かも縣下白砂糖の産額は熊毛郡種子島の白下糖あるのみにして他は黒糖とす今廿九年に於ける産額を擧ぐれば量目二百六十三萬五千貫目にして其價格は五拾万五千八百八十圓に及び是亦た増加の傾あり
 織物 大島紬薩廣飛白の名は世に喧稱せられ流行の一粧飾品として奢に儉は用ひらる今廿九年中に於ける産額は拾五萬四千反にして價格貳拾五萬圓に上はれり是れ以上二品のみみ非すと雖ども其産額乃九分九厘は以上二品に歸せざるを得ず
 煙草 薩廣煙草の佳を云ふものは必先づ指を國分に縷す國分は我國煙草栽培の創地にして車田、伊勢ヶ尾敷、龍王、砂走、武元を五ヶ所と呼べり而かも産額は出水を以て最とせり

其他垂水指宿も亦た著名の地とす今廿九年中の收穫高は五拾五萬五千貫に及べり製造高は貳拾參貫參千參百貫にして金額六拾九萬〇四百圓及び
 柑橘類 鹿兒島縣下に於ける柑橘は包皮光澤ありて最も甘味あり特に櫻島密柑阿久根文旦は最も世に賞美せらる本縣知事加納子爵は深く意を殖産興業に注せられ奮つて此種の摸範園を鹿兒島郡荒田村に起こし名けて柑橘園と云へり各種の橘類を栽培しあり讀者にして深く意を注するの士は許可を得て參觀せば益すること多かるべし
 海産物 枕崎屋久島の鱈節、川邊類珪等南方海岸に於ける鯖鮓の漁獲並に西目海岸に於ける鰯、鯖の收穫等を算すれば二十九年に於ける價格は百萬圓以上に及べり尙は乾物鹽物を加ふれば二百萬圓にも及ぶべし
 鑛物 縣下の鑛區は其數二百餘其内金鑛尤も多し二十九年に採掘せる各種鑛物は價格二十五萬圓に及べり其内山ヶ野、芹ヶ野、鹿籠の金鑛、谷山の錫鑛は尤も著名なるものあり、錫は用ひて各種の器具を造れり鹿兒島名産乃一に居る
 櫻島大根 は形楢圓にして蕪に似たり一個の周り三尺余あ及ぶ馬背に三個を乗せて幾かに歸る其異大なる他國人の想像すべきに非ず而かも價最も廉拾錢に三四本を買ふを得べし
 竹器 薩隅日の州竹特に多し而して其大なるものに到りては周圍三尺餘に及ぶ是れを以つて酒器茶器行厨硯箱を製す尤も雅致あり
 七島煎脂 鯨節の煎脂を以て作る物を煮るときに用ゆれば能く鯨節の代用をさすと云ふ
 其他菓子類には
 かるかん 白色にして羊羹に類す以て茶受けとあるべし味尤も淡にして美あり

まいかる 乾餅に類す亦た以て茶菓とすべしかるかんに比して稍劣れり
 新照院の馬物 是れ最初新照院町に製りしものありて遂に名とありしものか黯黒色よして
 棒に類する團子あり
 双棒團子 磯天神祠畔の茶亭よ就ひて茶菓を呼べば朱盆の上に二本の竹棒を差したる焼餅
 を出す大宰府梅ヶ枝餅に似たり味稍可なり藩閩當時の土風の尙は此好下物に存するかを
 追憶するものあり
 物産に就ては未だ記すべきものほれども紙數に限あり拙筆す

諸官衙學校

- 鹿兒島縣廳 山下町 知事 子爵 加納 久宜
- 書記官 菊地 武一
- 警部長 宮地 佐之助
- 參事官 三宅 源之助
- 技師 片田 豐太郎
- 技師 保科 圭三郎
- 鹿兒島監獄署 小川町 典獄 鈴木 和介
- 鹿兒島郡役所 山ノ口町 郡長 藤 良之助

- 鹿兒島市役所 山下町 市長 上村 慶吉
- 助役 本田 省三
- 鹿兒島警察署 加賀美 安之助 署長警部
- 第四十五聯隊 鹿兒島郡伊敷村 聯隊長陸軍歩兵中佐 野 島 丹 藏
- 鹿兒島聯隊區 司令官 歩兵少佐 橋 本 謙 作
- 鹿兒島地方裁判所 山下町 所長 判事 小澤 甚市
- 部長 判事 早田 綱之助
- 檢事正 檢事 秋田 政 徳
- 鹿兒島區裁判所 山下町 監督判事 隈 部 三 郎
- 鹿兒島稅務管理局 山下町 局長 田 中正 道
- 司稅官 永 田 實

鹿兒島稅務署長 山下町 三
 鹿兒島郵便電信局 小川益三
 鹿兒島葉煙草專賣所 富村 徹 彌
 鹿兒島葉煙草專賣所 長田町
 所長一等葉煙草專賣所長 平田 孝二 郎
 鹿兒島大林區署 長田町
 署長 林務官 永田 正 吉
 鹿兒島小林區署 上龍尾町
 署長 營林主事 厚池 兼 治
 鹿兒島縣尋常師範學校 山下町
 校長 林 俊太郎
 鹿兒島縣尋常中學校 山下町
 校長 岩崎 行 親
 尋常中學校造士館 岩崎 山下町
 校長 岩崎 行 親
 鹿兒島簡易農學校 上荒田村
 校長事務取扱

本縣技師 片田 豐太郎
 市立商業學校 有村 彦九郎
 女子徒弟弟興業學校 神崎 宗 八
 鹿兒島高等小學校 新納 軍太郎
 校長 山下町
 鹿兒島授產學校 肥後 幸 盛
 校長 山下町
 鶴嶺女學校 東千石町
 校長 津サ一子
 鹿兒島縣會議事堂 山下町
 議長 平田 二 郎
 鹿兒島商業會議所 築町
 會頭 宮里 正 靜
 鹿兒島縣農工銀行 山下町
 頭取 折田 兼 至
 鹿兒島病院 山下町
 院長 日高 昂

鹿兒島土產

會社
 株式會社鹿兒島縣農工銀行
 株式會社浪花銀行支店
 株式會社第四百七十七銀行
 株式會社第七十三銀行支店
 合名會社黑松銀行
 株式會社鹿兒島貯蓄銀行
 鹿兒島汽船株式會社
 慶港汽船株式會社
 大坂商船會社鹿兒島出張所
 三島瀨船株式會社支店
 鹿兒島興產株式會社
 鹿兒島授產會社

銀行會社

鹿兒島長崎稅關監視署
 長崎船司檢所鹿兒島支所
 第六憲兵隊首部
 三州義塾
 博約義塾
 山下町
 山下町
 山下町
 高麗町

所在地名	營業種別
山下町	銀行業
築日町	銀行業
六日町	全
沙見町	全
金生町	全
六日町	預り金、銀行業
住吉町	海運業
汐見町	海運業
汐見町	海運業
住吉町	海運業
易居町	砂糖及諸物產
山下町	織工卷蓆製造

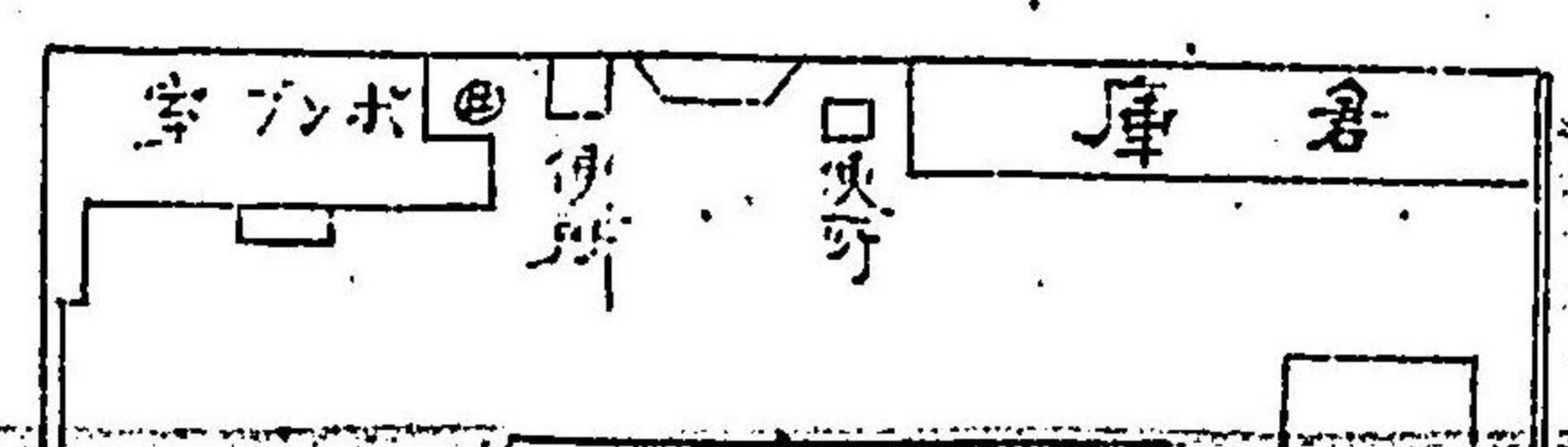
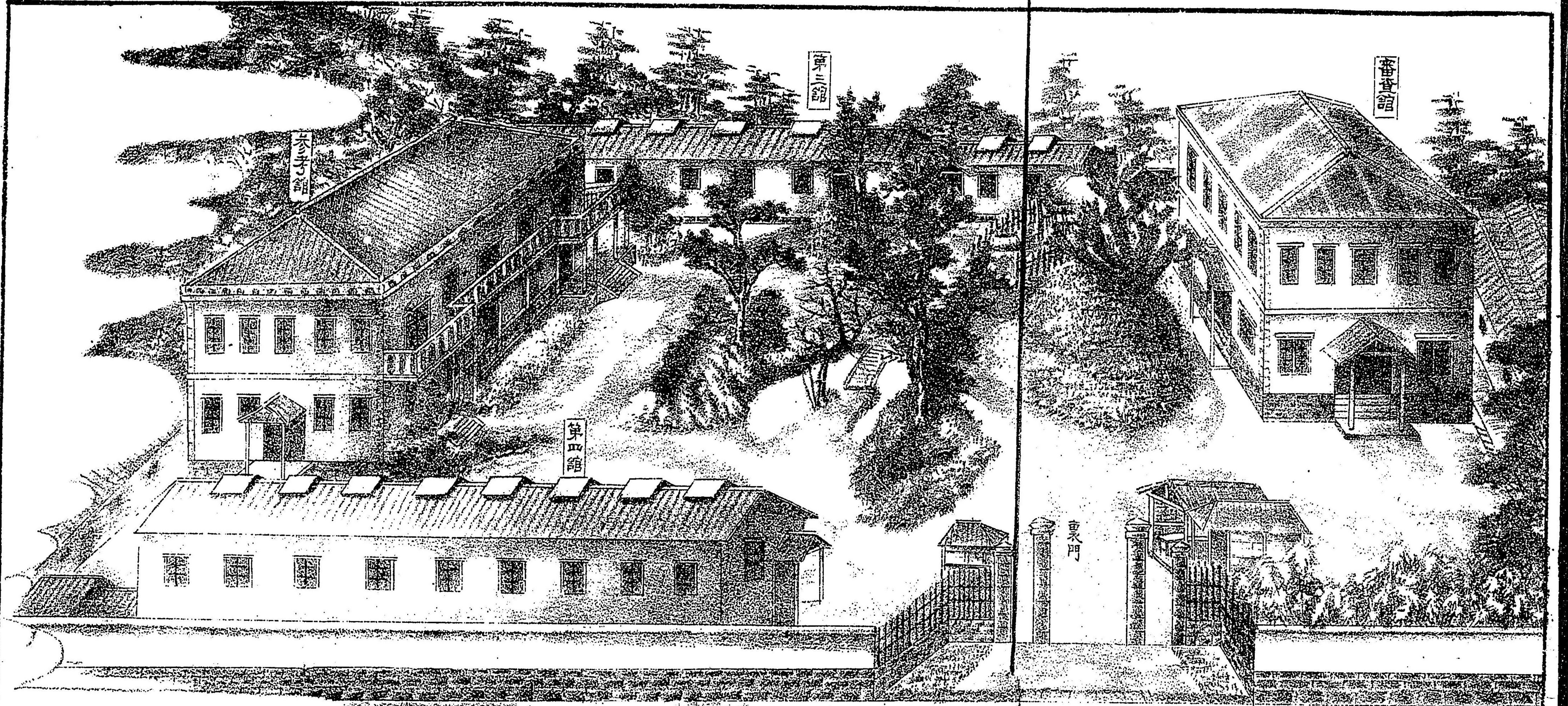
鹿兒島土產

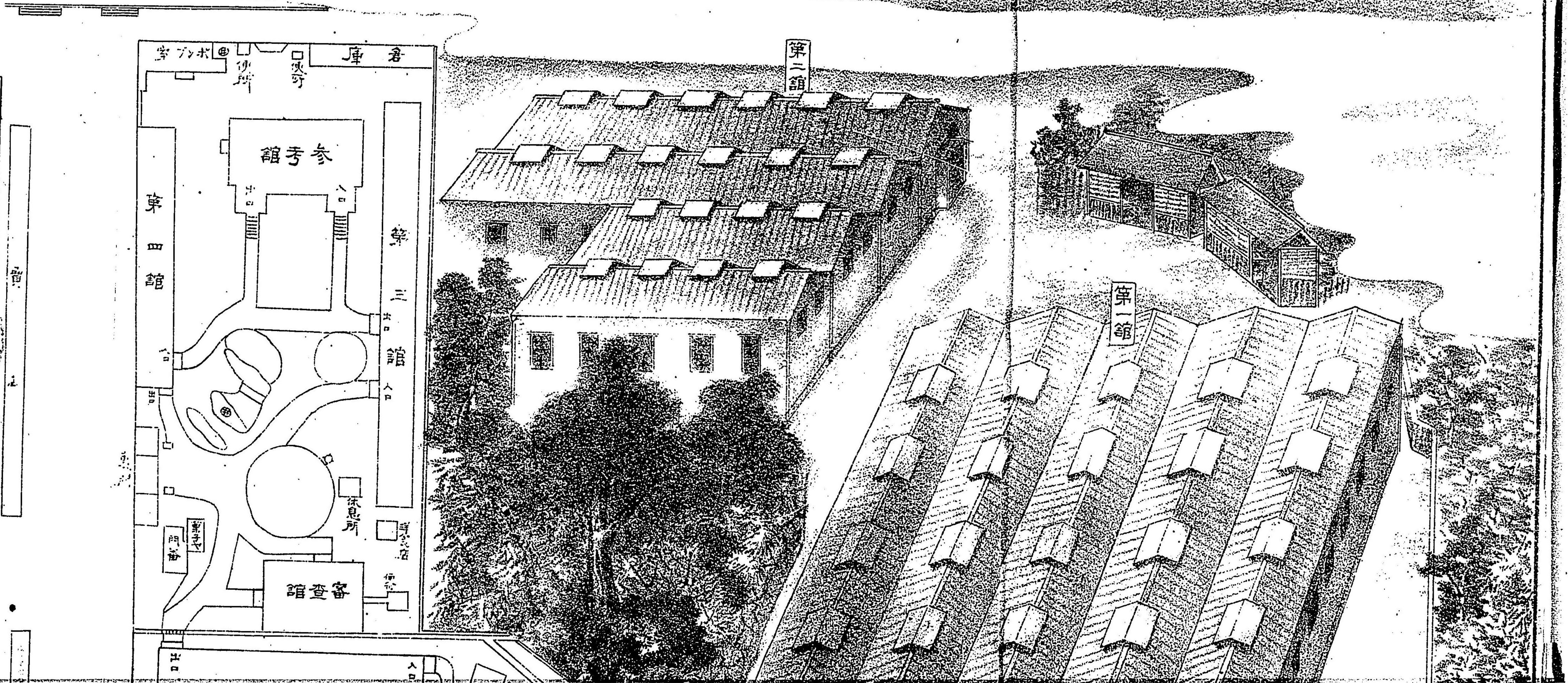
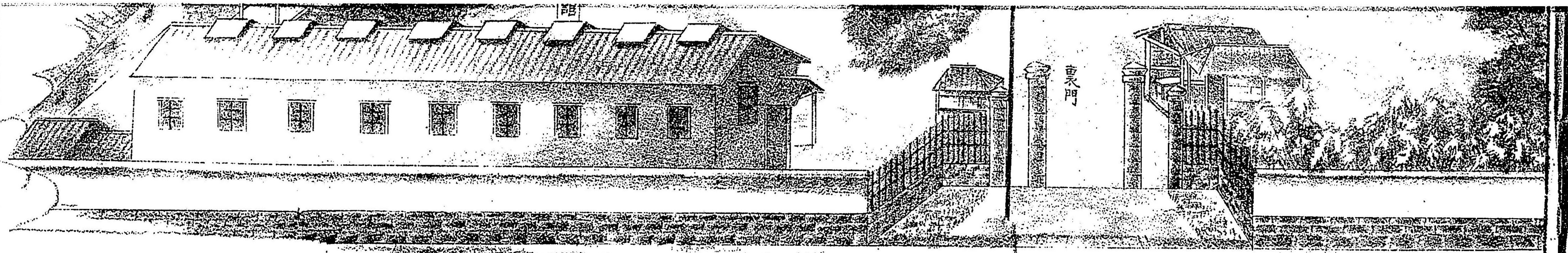
合名會社木鶴商會
 鹿兒島肥料合資會社
 鹿兒島酒造合資會社
 鹿兒島電氣株式會社
 鹿兒島勸工合資會社
 御着屋勸工合資會社
 鹿兒島魚類合資會社
 大坂硫黃礦業株式會社
 種畜舍
 鹿兒島授產會社
 鹿兒島繭絲講習所
 鹿兒島製糸場
 磯鑄工場
 金庫
 鹿兒島本金庫
 新開社
 鹿兒島新開社

工場

場

所在地	製造品類
車川町	烟草製造
小川町	肥料販賣
柳日町	酒造業
六日町	電氣業
金生町	勸工場
東千石町	勸工場
中町	魚類販賣
泉町	鑛業
上龍尾町	種畜業
所在地	製造品類
山下町	織物卷蓆
清水馬場町	生糸
山下町	生糸
磯島津邸内	鑄物
築町浪華銀行内	
山下町	





證查室

第二館

第一館

事務所

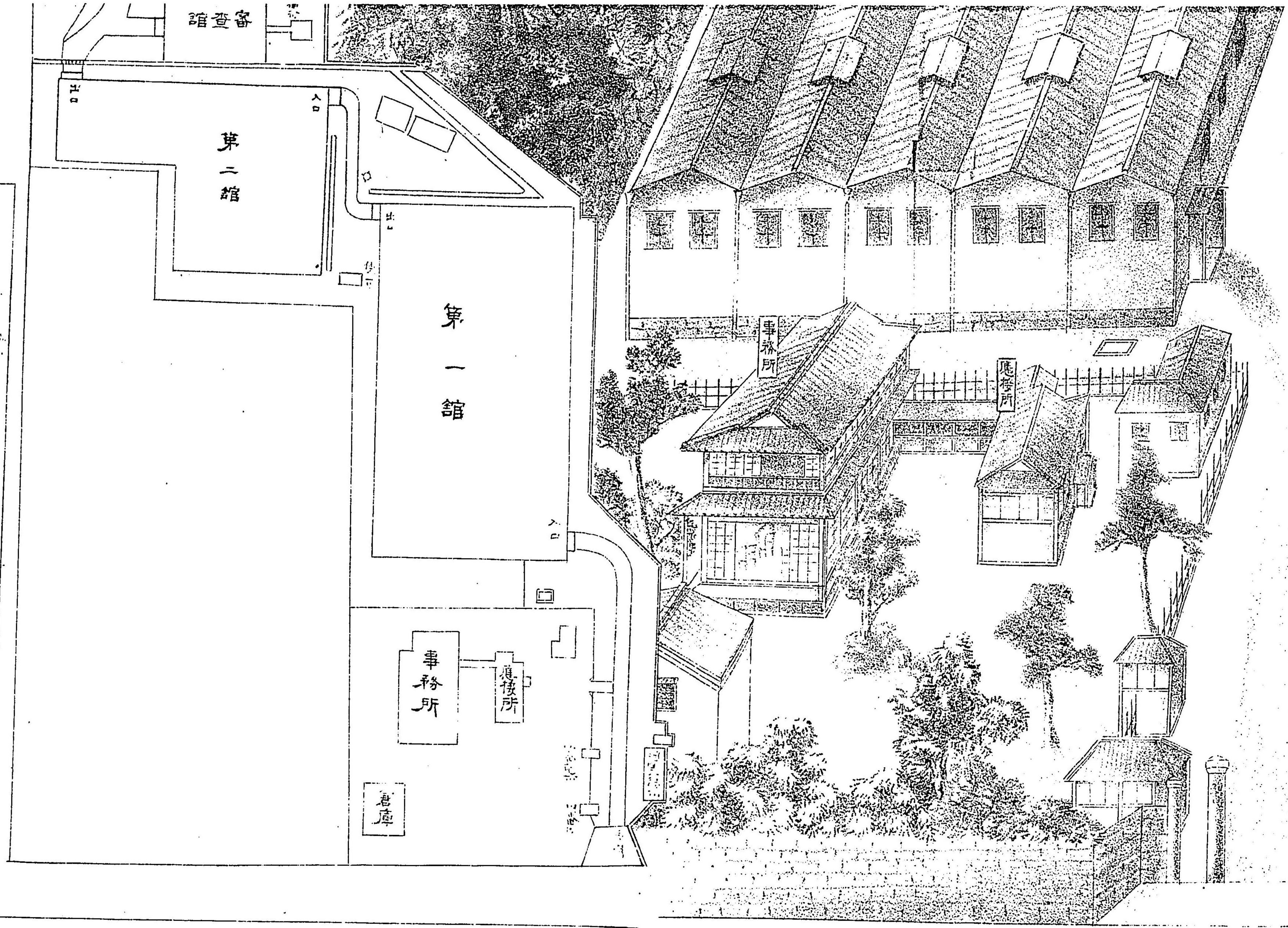
應接所

倉庫

事務所

鹿寮所

衣門



第十回九州
沖繩八縣聯合共進會案內

附錄

本會の由來

九州沖繩八縣聯合共進會は九州土產業一大刷新を加へ以て國益を増進し斯業乃發達を希圖するの目的を以て其第一回を長崎に開催したるを以て始元とす實も明治十五年十月に在り其後第二回を我鹿兒島に第三回を熊本に第四回を佐賀に第五回を福岡に第六回を大分に第七回を宮崎に第八回を沖繩に開かれたり此の開會は明治二十七年春ありしが聯合各縣を一巡し終りて全年各縣の間に再び本會を繼續するの義成り明治三十年二月を以て再び初回を長崎市に開會し當時第九回九州沖繩八縣聯合共進會と云へり而して此の回より出品々目其他に於て左の各項を加へたり

- 一工業品に關する花蒔及び陶磁器を新に陳列品に加へたる事
- 二從來參考品は陳列品の生産上直接に參考とあるべきものも限りたるも今回其範圍を擴め生産地の重要物產若しくは重要物產たり得べきものをも參考品として陳列するを許したる事
- 三賣店を設け生産地の重要物產若しくは重要物產たり得べきもの（勿論陳列品其種類を同ふすると否とを問はず）の販賣を許したる事

蓋第一回より第八回に至る迄本會の出品として陳列を許しざる者は主として農産物若は

水産物にして工藝品に屬する者は僅に織物乃一種に過ぎずして而かも此の種の追加は概近
 比事に屬せり然るに第九回よりは更に花筵及び陶磁器を増加し以て工藝品に屬する陳列品
 を加へて農工業をして両ながら進歩發達せしめんとするの域に至らしめたるものは社會の
 趨勢と云ふと雖も抑も亦た本會の進歩と云はざるべからず況んや上述するが如く参考品の
 範圍を擴め販賣店の設立を許るし特に今回の如き當業者として廣告に出品に最大利便を興
 ふるに至りしは深く本會創設の主眼たる産業の刷新國益の増進を計るに於て其効果の著し
 きものあるを信するなり

今や砌外の雪漸く解け江南處々の梅南枝北枝齊しく開くあり春意今より漸やく酬かるべし
 此時を以て第十回九州沖繩聯合共進會を我鹿兒島市に開催せらるゝあり、遠來の客此の産
 業の進歩を觀、此の山媚水明の風光を弄んで郷に歸るの日は桃花扇傳奇中の

月落煙波路不眞。 小樓紅處是東鄰。

秦淮一里盈盈水。 夜半春帆送美人。

の概あり其樂乃特に悠々たるものあらん

出品の概況及各縣出品一覽表

本會第一回を長崎に開きたる當時の出品點數は僅に千六百五十二點にして其後毎回多少の
 増加ありと雖も第八回を沖繩に開催したる時に於ては猶ほ九千四百七十四點に過ぎざりし
 然る且前回の初回乃ち第九回を長崎に開きたる時は一躍して二萬〇二百二十八點の多き
 に達し今回は無慮參萬二千六百貳拾七點の多き及べり是れ産業社會の進歩發達と俱に各
 縣主任者の勧誘も亦預つて功ありとす深く諸士の辛苦を多とし併せて我が産業社會乃爲め

に祝するなり

今更開會前最近の各縣出品點數表を掲ぐべし開會の曉に方りてり多少の異動あるは免れざ
 るべきも格別の差はあらざるべし

物品點數表

品名	長崎	熊本	宮崎	沖繩	大分	鹿兒島	福岡	佐賀	計
米	一、三三四	六〇五	〇	四一	七二四	九〇〇	〇四〇	八四二	二、二二六
大豆	九四四	六四〇	〇	四三	三九〇	五七〇	三〇六	二五六	一、四九九
麵	九一	二一〇	一四五	四	一九二	二五〇	七三	七六一	〇四一
生絲	三三	四七	二七	〇	二二	一〇〇	三九	六	二七四
紅茶	一六	一五四	〇	〇	一三	四	六〇	一二	二二九
綠茶	九六	九〇	一〇〇	〇	二九	一四二	二二	七七	五五六
砂糖	六三	三〇八	〇	八三〇	三〇	九五六	九	二	一九六
木蠟	四五	四二	〇	〇	五六	四五	八〇	六四	三三三
製蠟	一四一	二四一	〇	六	三七	四六五	一〇八	九九	〇九七
絹織物	七二	二二三	〇	四四	九八	四〇〇	二四九	七五	一六一
綿織物	九六	二〇五	〇	六八〇	一八九	三〇〇	〇二六	三六七	八六三

鹿 兒 島 土 産

熊本縣屬 熊務係 竹田信之 沖繩縣屬 秦 靖 宮崎縣屬 野崎榮次郎
 鹿島縣屬 森友愛 鹿島縣技手 別枝行正 鹿島縣技手 副田金之助
 佐賀縣屬 井手平吉 熊本縣屬 井場熊喜 鹿島縣屬 山崎 弘
 鹿島縣屬 陳列係 鹿島縣屬 柴田龜太郎 大分縣屬 高野文彌
 本縣屬 市來勘兵衛 本縣屬 竹内 進 本縣屬 岩山直昌
 本縣屬 淵邊伸吉 福岡縣技手 柳原興作
 沖繩縣屬 川口伴藏 鹿島縣屬 池端源藏 鹿島縣技手 館 三之吉
 熊本縣技手 村上巳之助 福岡縣屬 勝木研二
 會 計
 長崎縣屬 第家登良二 大分縣技手 立野貫一 鹿島縣屬 森谷八千夫
 鹿島縣屬 川上運次
 各縣事務所は左記の處に設けられたり
 熊本縣 山下町有馬方
 大分縣 三官橋通萩原小路黒葛原方
 佐賀縣 住吉町田中徳藏方
 福岡縣 山下町中谷方

長崎縣 吳服町濱田方
 宮崎縣 六日町中島方
 沖繩縣 上龍尾町坂元方

縦覧人心得

本會を參觀せんと欲するものは先づ左記の各項を心得て縦覧あるべし
 〔第十回九州沖繩八縣聯合共進會規則抄〕

第四章 縦覧人心得

第二十七條 開會中ハ毎日午前第九時より午後第四時迄衆庶の縦覧を許す
 但會場都合に依り時間を伸縮し又は臨時入場を止むるよしあるべし
 第二十八條 縦覧人は必ず一人一枚づゝの通券を所持すべし
 但通券は代價を要せず
 第二十九條 通券は入場の節門鑑より受取り出場の節門鑑に返附すべし
 第三十條 手荷物を持ちし又は獸類を牽て會場内に入るを許さず
 但傘杖は此の限りにあらず
 第三十一條 列品場内ニ於て喫煙を禁す
 第三十二條 看護人の許諾を得るに非されは擅に列品に觸るゝを許さず
 第三十三條 出品物を講求せんとするものは看護人に就き承合すべし
 第三十四條 癡癪又は醉客と見認るときは入場を許さず或は會場より退場せしむるよしあるべし

陳列順	長崎	熊本	宮崎	沖繩	大分	鹿兒島	福岡	佐賀	計
米	一、三三四	六〇五	—	四一	七二四	五、九〇〇	〇、四四	八四二	二、三九〇
大豆	九四四	六四〇	—	四三	三九〇	五七〇	三六〇	二五六	一、四九
蘭	九一	二一〇	一四五	四	一九二	二五〇	七三	七六	〇、四一
紅茶	一六	一五四	—	—	一三	四	三〇	一二	二、二九
綠茶	九六	九〇	—	—	二九	一四二	二二	七七	五、五六
砂糖	六三	三〇八	—	八三〇	三〇	九五六	九	—	一、一九六
生糸	三三	四七	—	—	二二	一〇〇	三九	六	二、七四
木蠟	四五	四二	—	—	五六	四五	八〇	六四	三、三二

而して會場内を縦覽するには左の案内記に依りて逐次縦覽し行くを便とす

會場案内

一會場の入口即ち表門は當市山下町通り西本願寺別院の裏手に當り鹿兒島地方裁判所と縣廳と乃中間に在り門を入るには門前より通券を受取り門をれば直ちに右側に小建物あるは消防組の詰所にして其隣に便所あり左側に在るは巡查交番所なり夫れより二三歩を移して左側黒門内の正面に在るは聯合共進會事務所なり又之を直角右側に在るは鹿兒島市醫會及日本赤十字社鹿兒島支部救護團の出張所にして純はら會場内傷病者の治療救護の任務に當るとを更に數歩を進め左折すれば第一館に入る

第一館は米、大豆、蘭、紅茶、綠茶、砂糖、生糸、木蠟、製造煙草、紙、推茸の十一種あり

製造	一四二	二四一	—	六	三七	四六五	一〇八	九九	〇、九七
紙	六二	八〇	一四三	—	五九	一一四	九五	六〇	六、一三
推茸	六〇	四八	一四〇	—	七〇	八四	三	—	四〇五

第一館を出れば左方數歩の距離に便所あり右折すれば正面は二棟の休憩所を設く一は坂本森太郎の出張店にして日本辨當を調理し一は一般縦覽人の休憩所とす左折すれば第二館に入る第一館と第二館との間に千二百燭光の孤光燈の高柱を樹てたり

第二館は陶磁器花瓶の二種あり

第二館を出れば左方數歩乃所に便所あり土橋を渡り數歩左方に建設ある休憩所は菓子商明石屋の出張店にして休息の顧客に茶菓を供すべく右方は審査館西方の入口あり夫より審査館を右方に見て砂利敷の道を進めば蘇鐵山に並び竹垣を以て繞らせる來賓接待所あり該建物之主催の鹿兒島縣に於て特に設けたるものにして建築材料は皆縣下の産物を集めて構造したる者あり即門柱と垂木とは俱に二種の榿樫より成り家屋は竹羊齒蘇鐵葉煙草蔴莖等を以て造作せり此家は朝野貴賓の休憩所に充げるとを爰は一千二百燭光の白色電燈あり審査館と第三館と乃一角にある竹造りの休憩所は鶴鳴館の出張店にして洋酒洋食等顧客の需に應すとあり夫れより歩武を進むれば西に面して建設せる一館の入口に達す是即ち第三館あり

一第三館は煙節、乾鮑、鱧鱒の四種にして館内特に農具及柑橘陳列場あり農具は參考品として陳列したるもの柑橘は本縣柑橘會の開設に屬する縣内の品評會にして三月五日より開

場すると云ふ

第三館を出て、右方石造の建家に入れば即ち参考館

参考館の入口を出て數十歩を進み右折すれば第四館の入口に達す

第四館は絹織物木綿及雑織物の二種あり

場内の観覧は是にて終り前の方石門に抵り門衝に通券を返付して場外に出つべし因に場外二三の要項を讀者に紹介すべし

賣 約 所

一出品賣約を爲さんとする者は各縣賣約所に至り買價三分一乃手付金を出し領收証を受取り置き開會後指定の期日内に於て殘餘乃金額を賣約所み納め現品を受取る可し即ち各種賣約所の位置左の如し

陶磁器賣約所は第二館内にあり其他の賣約所は参考館(石室)の右脇並ぶ石門(出口)左脇の兩所あり

販 賣 店

又會場裏門を出て、南の方往還乃左右は渾て各縣の賣店にして先の右側に隣なる賣店の縣別店主物品等を列擧すれば左の如し

但賣店は會場裏門の方より取り付きの店を以て一號として起算せり

又其東西兩側の賣店は左の如し

- 西側第一號 熊本縣
- 西側第二號 佐賀縣

全	第三號	長崎縣	沈	壽	官	外四名	
全	第四號	沖繩縣	星	山	武	八郎	外四名
全	第五號	薩摩陶器	玉	利	正	太郎	
全	第六號	錫器	淵	上	武	右衛門	外壹名
全	第七號	竹器	藤	崎	專	左衛門	外四名
全	第八號	織物	東	郷	清	一	大島郡里村
全	第九號	煙草	西	川	德	太郎	中町
全	第十號	織物	中	村	勘	兵衛	加治屋町
西側	第十一號	漆器	泊	正	太郎	下龍尾町	
全	第十二號	農産物	福	井	太	平次	易居町
全	第十三號	陶器	永	野	五	平	泉町
全	第十四號	竹器	限	元	清	二	西櫻島村
全	第十五號	改良誘蛾燈	小	杉	嘉	之助	藤野
全	第十六號	空地	川	原	正	左衛門	櫻島赤水
全	第十七條	柑桶及櫻島大根種子	岩	元	常	助	堀江町
東側	第一號	織物	若	松	清	兵衛	金生町
全	第二號	煙草					
全	第三號	織物					
東側	第四號	織物					

全	第五號	薩摩陶器	大 迫 貞 吉	易居町
全	第六號	薩摩炭罐詰	有 川 貞 清	西千石町
全	第七號	煙草	薩摩株式會社	在揖宿郡
全	第八號	煙草	山 口 勘 左 衛 門	指宿村
全	第九號	織物	山 藤 田 喜 兵 衛	中 町
全	第十號	織物	竹 内 輔	伊津郡
全	第十一號	薩摩陶器	有 川 松 助	大島郡
全	第十二號	柑橘其他苗木	松 下 正 彦	伊津郡

馬匹展覽會

會場要門と路線を隔てて相對する麻舎は本縣産馬組合開催に係る馬匹展覽會場にして二月廿五日より向ふ一週間に七八十頭の馬匹を隔日に交換して出陳する所とす其種類は種牡馬種牝馬及仔馬とす農商務省直轄種馬牧場より特別牝牡各二頭の出馬あるべしと云ふ

協賛會

第十回九州沖繩八縣聯合共進會の當鹿兒島に開催に方り他の各種の會合も亦た相踵で當市に開かれんを九州沖繩各縣の勿論其他の地方より參集して此の盛會を觀んとする知名の士人も亦た決して少からざるべけれバ之を歡待し以て遠來賓客の勞を謝せんとするの議有志者間に成り協賛會と名けて鹿兒島市長上村慶吉氏を推して委員長と申し左の廣告をなし

廣 告

來ル三十二年二月當縣ニ於テ開催セル第十回九州沖繩八縣聯合共進會ノ開設ニ當テハ本縣ガ蒙ル直接間接ノ利益アルコトハ茲ニ多言ヲ要セザルハ疾ニ識者ノ知諒セラル、處ナルガ殊ニ其期ニ際シテハ多數ノ來觀者アルノ中ニ就キ其向ノ高等官ハ勿論農工商業ニ從事スル賓客ノ來觀モ亦敢テ擧カテサルヘシト信セラル、ニ就テハ其主催地タル本縣ニ於テハ夫レ相應ノ歡待其道ヲ盡サ、ルヲ得サルノ必要アルヲ慮カリ今般協賛會ナルモノヲ組織シ官民共同シテ遠來賓客ノ勞ヲ謝シ併セテ歡待ノ道ヲ盡シテ以テ満足ヲ與ヘントス然レモ茲ニ其費用出途ノ如何ヲ顧慮セハ結局有志諸君ニ此舉ノ御翼賛ヲ仰キ要ハ本縣主催地タルノ義務トシ以テ義舉ニ謀リ應分ノ御寄附アランコト伏シテ希望スル所ナリトス

追テ寄附者諸君ハ左記ノ各項ヲ諒セラレタキ事

- 協賛會委員長 上 村 慶 吉
- 一 本文ノ寄附金五圓以上ノ御方ニハ本會ニ於テ特ニ優待ノ方法相設ケ置キシ事
- 一 寄附金ノ中込ニ又ハ其取扱所ハ鹿兒島市役所内ニ設置セシニ付該所内會計係へ御送金被下度事

- 一 寄附金ニ代ユルニ物品ヲ以テセラル、モ差支ナシト雖モ該物品ハ本縣特有ノ製品ニシテ廣告的ノモノニ限ル事
- 一 聯合共進會開設ノ期モ眼前ニ切迫シタルニ就テハ本會ニ於テモ準備差急クニ依リ可成此際至急御寄附被下度事
- 一 寄附金ニ代ユヘキ物品ハ本縣特有ノ製產品ニシテ一ハ廣告的トナルベキモノニ限ル今其種

類ノ概略ヲ摘記セハ左ノ如シ

- 一刻煙草
- 一卷煙草
- 一竹器
- 一漆器
- 一花染手拭
- 一酒類
- 一車輓
- 一煎汁
- 一陶器
- 一大島紬
- 一鏗節
- 一板屋貝罐詰
- 一錫器
- 一薩摩耕
- 一錫

其他各地ニテ生産主要ノ製産物

而して傍はら多數の委員を設けて此の事務に宛らせたり今委員會にて決議せし款待趣向の重なるものは左の如し

一本會に徽章を調製し本會委員は勿論來賓並に五圓以上の寄附者に配附する事

一本會委員は勿論五圓以上の寄附者には聯合共進會開設中は特に優待入券の交附と開閉場式並に褒賞授與式には臨場せしめ度旨願出る事

一本會接待掛員の分擔を定むる事左の如し

宴會方 訪問方 出迎方

一本會宴會掛員の分擔を定むる事左の如し

献立方 會場整理方 會場接待方 餘興方 受附方

一海上より來賓者に對しては汽船入港の際船上迄出迎すへき事

一本會委員長並に接待員には本會より名刺を調製附與し置く事

(但其雛形は左の如し(雛形寄す))

一寄附金募集豫定額 協賛會にて共進會開設對して要する經費は更ニ豫定額を嵩めて貳

千貳百圓と爲し総て之を寄附募集する事

△宴會費 協賛會にて最も意を法々所のもの乃は遠來乃賓客等を優待し旅中の無聊を慰めんとするに在ることあるが中にも此等多數の人々を招待して一大宴會を開くこと其の重要な點とす同會招待すへき人々は農商務省高等官、各縣高等官、審査官、審査員、各縣委員、本縣委員、各郡委員、郡市長、協賛會員、五圓以上の寄附者、農工商に従事する賓客及び教育展覽會水産大會に出席の人々約六百名並にて席上福引の餘興等ある外に來會者一同に紀念として錫の盃一個を贈進する事

△煙火の打揚げ 総ての餘興として協賛會より共進會開會式の際二十發、褒賞授與式の際三十發、宴會の際二十發、教育展覽會の際十發、同宴會の際二十發、水産大會開會の際十發、同宴會の際二十發合計百四十發と打揚ぐる筈尤も右諸會の同日に開かるれば煙火も同様一所に打揚ぐる事

△茶菓等の饗應 共進會内は休憩所に特に協賛會より茶菓子並み巻煙草等を準備し置きて優待券を所持し居れる人々は隨意に此處に立寄りて休憩せしむる事

△地圖並に案内記 來賓者の便利を謀り市内の里程表を色分けにしたるの地圖並み市附近の案内記を贈呈する事

△競馬觀覽 本縣春季競馬の際には協賛會より同會場内み棧敷を設置し來賓一同は固より同會への寄附一同にも觀覽せしむる事

△新聞の寄贈 本縣を除くの外縣各縣の事務所は協賛會より鹿兒島新聞を閉會の當日まで寄贈する事

然るに本縣人士の義に再なる其寄附に就ての申込は物品を以てするあり金員を以てするあり最初二千二百圓の豫定ありしよ己よ參千圓以上及び豫定額を超過すること一千餘圓なりと云ふ是れ此の案内記中特筆して深く其義侠の心事を敬服する所以なり

共進會に伴ふ諸會合

明治三十二年二月第十回九州沖繩八縣聯合共進會開設中諸會の催ふしある日割左の如し

日割

- 二月十日 聯合共進會開會式
- 自二月廿一日 至二月廿一日 本縣醫會及醫學研究會
- 自二月廿四日 至二月廿六日 東本願寺ニ於テ英照皇太后陛下御三回忌法要修行
- 自二月廿五日 至二月廿八日 馬匹展覽會
- 自二月廿七日 至三月二日 東本願寺ニ於テ門徒惣供養法要
- 三月五日 西本願寺ニ於テ英照皇太后陛下御三回忌法要
- 三月六日 丁丑ノ役戰死者追弔法會
- 自三月九日 至三月九日 柑橘品評會及全褒賞授業式

- 自三月九日 至三月九日 西本願寺ニ於テ教區内門徒中死亡者惣供養法會
- 自三月十日 至三月十日 始良郡横川村中之ニ於テ馬匹品評會
- 自三月十一日 至三月十一日 水産支會常議員會
- 自三月十一日 至三月十一日 全樂談會
- 自三月十一日 至三月十一日 漁業組合成立式
- 自三月十二日 至三月十二日 聯合教育品展覽會
- 自三月十三日 至三月十三日 日本水産大會
- 自三月十三日 至三月十三日 九州教育大會
- 自三月十三日 至三月十三日 九州各縣農事試驗場長及巡回教師協議會
- 自三月十五日 至三月十五日 各村農事巡回教師及各村農事教授人會
- 自三月十五日 至三月十五日 九州聯合獸醫畜産大會
- 自三月十六日 至三月十六日 聯合共進會褒賞授與式
- 自三月十七日 至三月十七日 鹿兒島縣共同競馬會
- 自三月十七日 至三月十七日 聯合共進會閉會式

(二十五)

鹿兒島土產

鹿兒島元標	前驛トノ距離	元標ヨリノ距離
下神殿	五、〇七	〇、〇〇
市來	三、二四	八、三二
向田(川内)	四、〇六	一、三〇
西方	四、〇四	一、七〇
阿久津	三、一四	二、〇二
阿久根	四、二二	二、五〇
阿久根、高尾野、出水米ノ津間		七、〇七
高尾野	〇、〇〇	〇、〇〇
高尾野	三、二二	三、二二
高尾野	一、一三	四、三五
高尾野	一、〇七	六、〇六

鹿兒島、重富、加治木、敷根、宮崎縣境間

本表は遠來客の爲めに其重なる里程のみを掲ぐ

鹿兒島より各地間里程表

(三十五)

鹿兒島土產

鹿兒島	前驛トノ距離	元標ヨリノ距離
重富	四、〇〇	四、〇〇
加治木	一、二九	五、三〇
濱之市	一、三四	七、二八
敷根	一、二四	九、一六
通山	五、〇九	一、四三
縣境	二、〇四	一、六三
敷根福山間	一、〇八	一、〇二
濱ノ市ヨリ國分間		二、二四
濱ノ市國分間	一、〇五	
鹿兒島蒲生間	六、〇七	
加治木、橫川、栗野、宮崎縣境間		
加治木	〇、〇〇	〇、〇〇
加治木	三、一三	三、一三
加治木	二、一七	五、三一
加治木	一、二七	七、二二

鹿兒島土產

起點地名	行先地驛名	賃錢額
濱之市	鹿兒島元標	金參拾貳錢
	重富	金拾六錢
	加治木	金八錢
	國分宮	金五錢
	日當	金七錢
	安樂山	金拾九錢
	重久	金九錢
	大窪	金貳拾貳錢
	霧島	金參拾貳錢
	敷根	金八錢
	岩川	金五拾錢
	通山	金參拾八錢
	大窪	金拾七錢
	霧島	金貳拾七錢
	小島	金五錢
	敷村	金拾參錢
	岩根	金五拾五錢
	通山	金參拾八錢

鹿兒島土產

起點地名	行先地驛名	賃錢額
枕崎	鹿兒島元標	金七拾四錢
	知覽	金貳拾七錢
	加世田	金貳拾貳錢

- 一、前指定地外ハ一人一里ニ付金五錢以内但十歳未満ハ半額三歳未満ハ無賃
- 二、壹里未満ハ貳町毎ニ金參厘以内
- 三、前指定地外ノ坂路及雨雪夜行ハ貳割ヲ増ス
- 四、一頭立ノ雇切ハ其乗客三人迄ハ五人分以内四人以上ナルトキハ六人分以内ノ賃錢トス
- 五、二頭立ノ雇切ニ在テハ前項ノ比例ニ依ル
- 六、手廻荷物ノ賃錢ハ重量貳貫目以内無賃貳貫目以上ハ每一里ニ付壹錢以内トス
- 七、乗客ノ都合ニ依リ停車スルトキニ於ケル増賃ハ十分毎ニ金壹錢以内トス

82
97

明治三十二年二月廿五日印刷
明治三十二年三月四日發行

定價金貳拾錢

鹿兒島市生産町八拾番戸

著作兼 發行者 森 新太郎

鹿兒島市山下町百七拾五番戸

石版銅版 印刷者 柳澤源四郎

鹿兒島市山下町百七十三番戸

活版印刷者 松岡藤之助

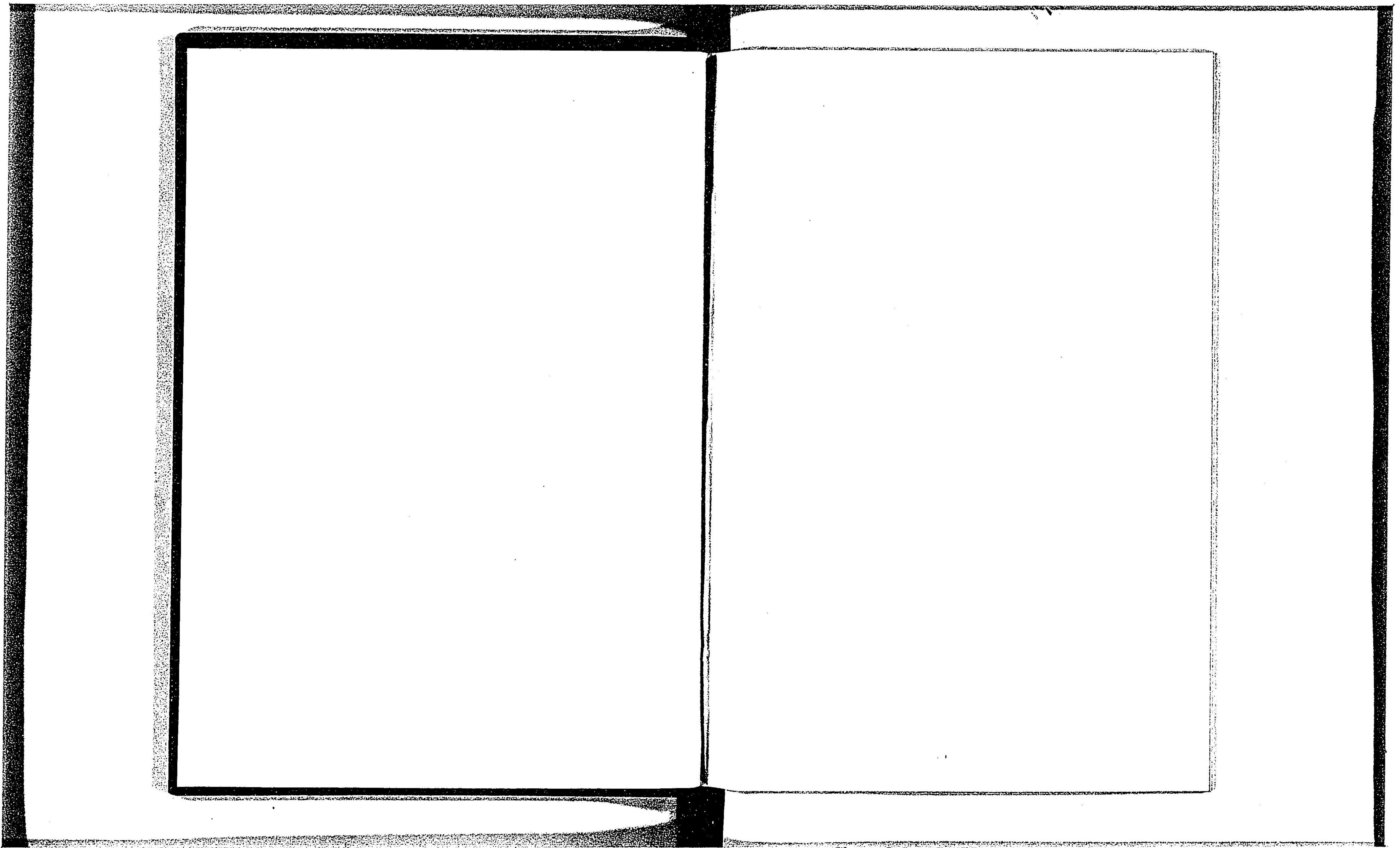
鹿兒島市山下町百七十三番戸

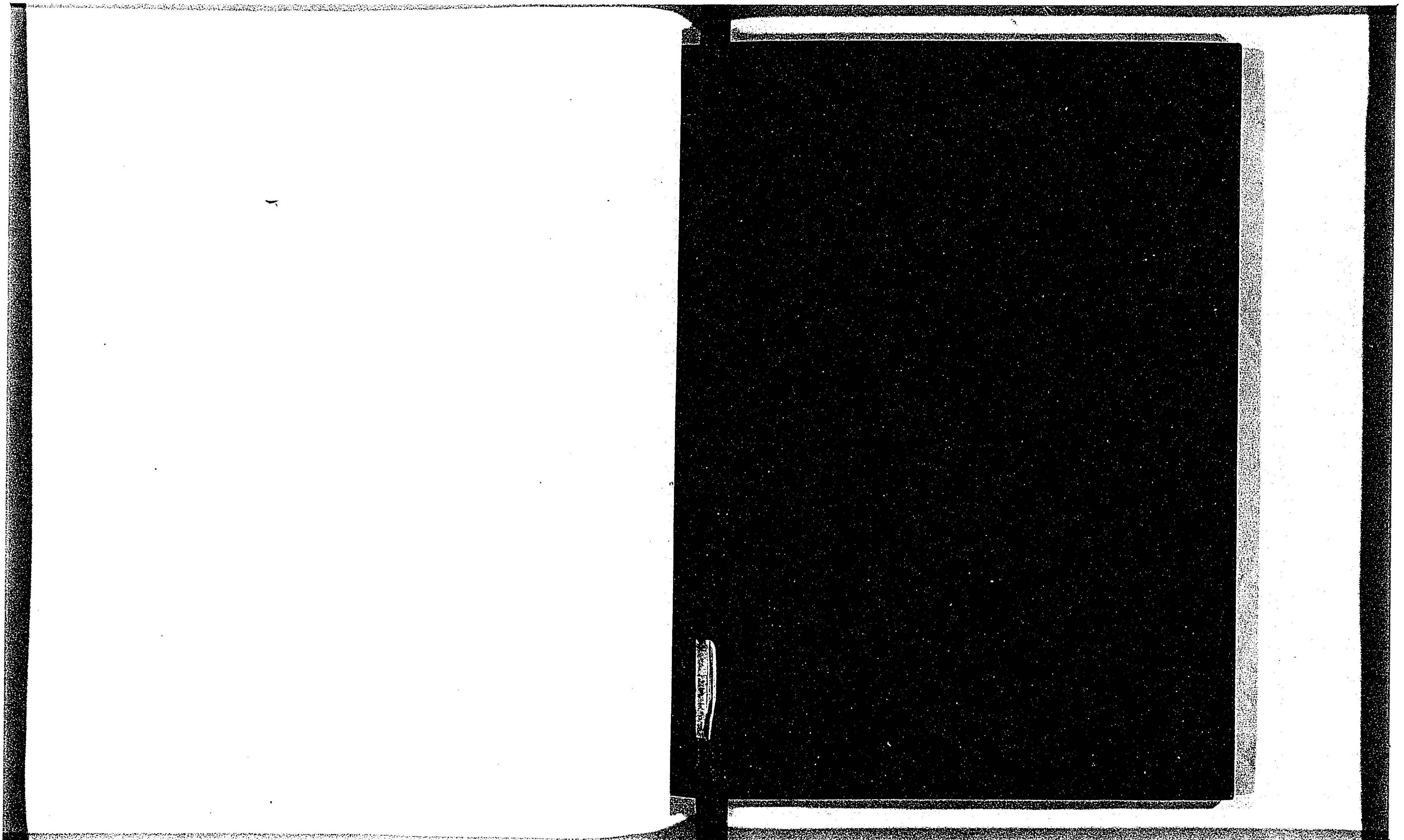
印刷所 鹿兒島活版所

鹿兒島市山下町百六十九番戸

發賣所 川畑助太郎

1-320





82

97

026176-000-3

82-97

鹿児島土産 附, 共進会案内

森 新太郎/著

M32

ADC-3861



1000

